

42366

教科書文庫

4
8/0
42-1938
2000.0 81499

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

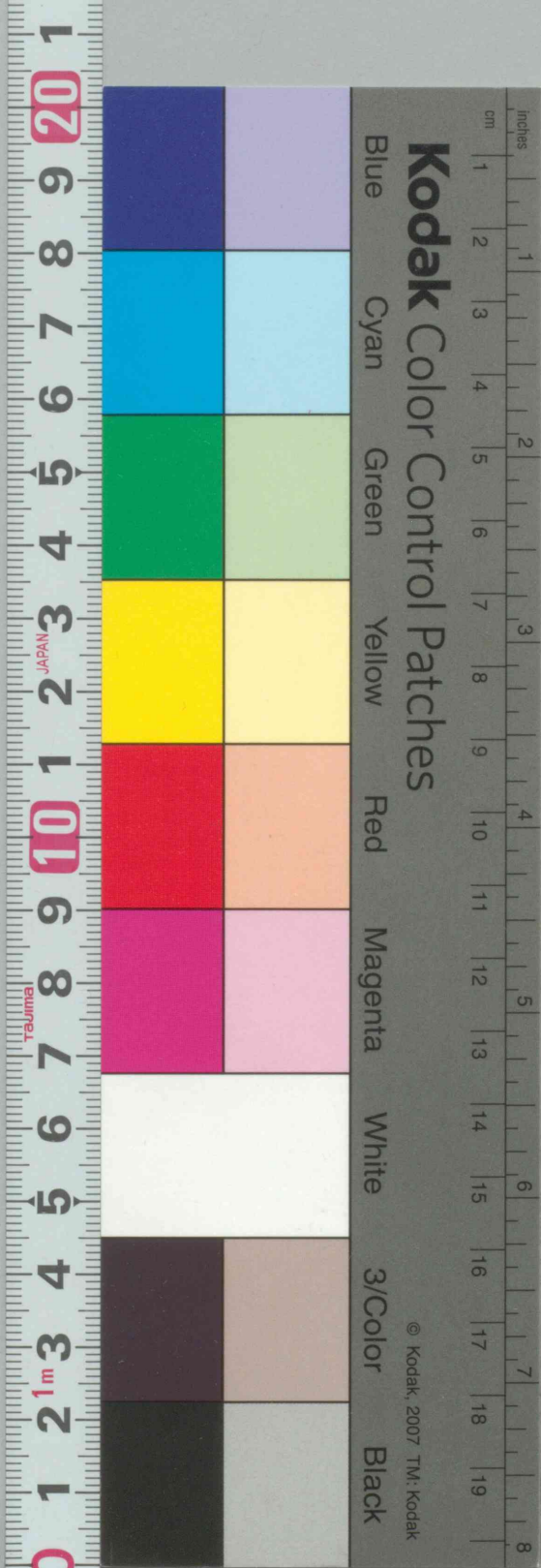


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
810
昭13

女子新國語讀本

新制版

卷三

資 料 室

4b
810
AB13

京都帝國大學
教授文學博士 澤瀉久孝
奈良女子高等
師範學校教授 木枝增一

共編

女子新國語讀本

新制版

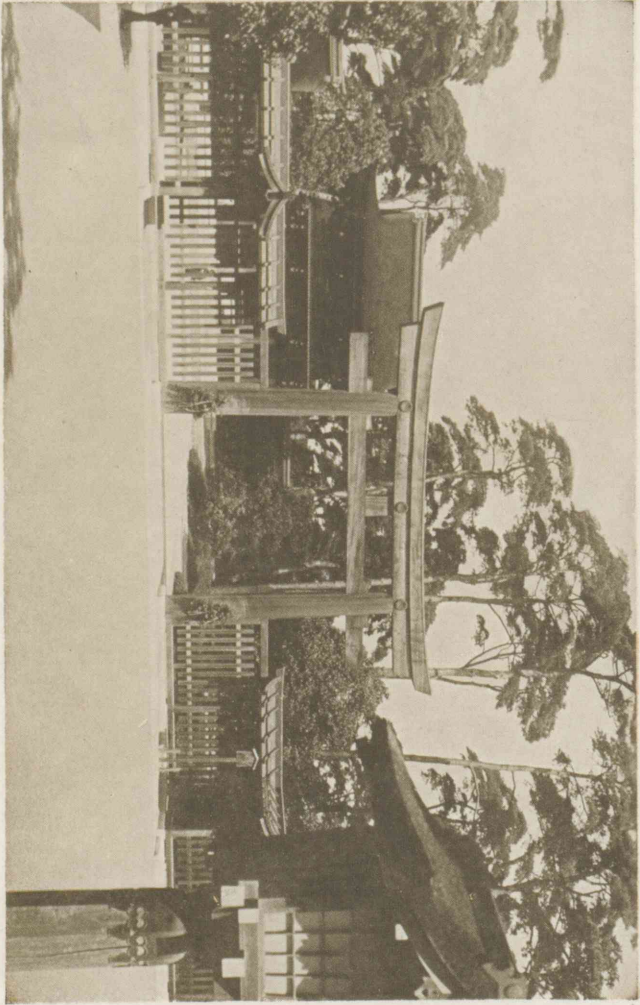
文部省檢定濟

昭和十三年二月十五日
高等女學校實業學校國語科用

修文館發兌



(第一課參照)



明 治 神 宮



編纂の趣意

本書は、昭和十二年三月二十七日改正發布せられたる高等女學校國語科教授要目に則り、左の諸點に留意して編纂しました。

- 一 國民精神の體得——これに就いては、國體の精華國民の美風偉人の言行を敍し、特に日本女子としての特性を養ふに足る材料を選定しました。
 - 二 文學精神の涵養——これに就いては、國文學の本質に基づき、時に於ては古今、形に於ては様式の種々相に互り、心情を優雅ならしむべき材料を選定しました。
 - 三 國語精神の把握——これに就いては、各教材が總べて醇正なる國語に採つてあるのは勿論、更に國語の正しい相を認識せしむると同時に、國語愛護の念を培ふに足る特別なる材料を選定しました。
- 右三點の外、世界の情勢を知らしめて圓滿なる國民的常識を養成するに足るもの、女子の本務たる家庭生活の趣味を向上せしめるに足るものをも加へました。

昭和十二年七月

木 枝 増 一
澤 瀉 久 孝

明治神宮

目次 卷三

一	明治神宮
二	明治神宮奉納獅子舞歌
三	生きた言葉
四	當
五	峠の茶屋
六	巴里通信
七	お遍路さん
八	松坂の一夜
九	心の小徑
一〇	雑草
二	蚊

溝口	白羊	一
北原	白秋	二五
西尾	實	元
藤井	紫影	四
夏目	漱石	元
横光	利一	三
荻原	井泉水	元
佐佐木	信綱	四
金田一	京助	五
齋藤	茂吉	六
新井	白石	六

三	蜂
三	白日の涙
四	櫻井驛
五	言葉の遣ひ方
六	新秋頌
七	現代短歌抄
八	いろはがるた
九	笑話
一〇	柿二つ
三	果物の味
三	音の世界
三	吾が家の富
四	自然の教訓
五	道

吉村	冬彦	七
今井	邦子	八
松居	松翁	九
玉井	幸助	一〇
西條	八十	一〇九
島崎	藤村	一七
醒睡	笑	一三
高濱	虚子	一四
正岡	子規	一三
宮城	道雄	一三
徳富	蘆花	一四
羽仁	もと子	一五
芳賀	矢一	一五

附録

國語假名遣表

常用漢字表

略字表

國字表

……終……

女子新國語讀本 新制版 卷三

口繪参照

溝口白羊

名は駒造、大阪府の人、文章家、明治十四年(二五二)生。

代々木

東京市澁谷區代々木外輪町。

金屬的

曳々聲

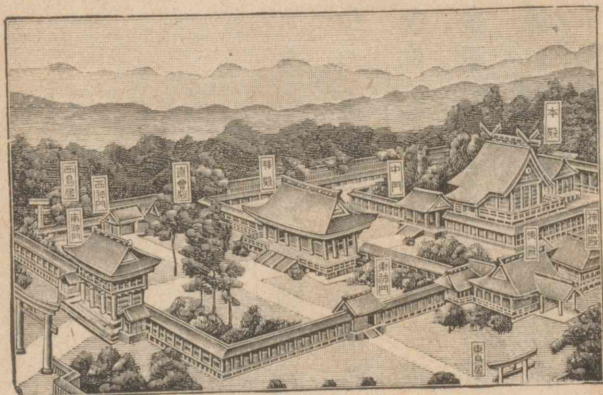
一明治神宮

溝口 白羊

あの中に明治神宮が建つのだ！ 何處からともなく高く
 匂つて來る新しい檜の香をかきながら、私は幾度代々木の森
 を仰いだ事だらう。森の中からは、時として、石を切るらしい
 金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて
 流れて出た。或時は、六七丈もある大きな獻木を牛車に載せ
 て多數の人夫が汗みどろになりながら、曳々聲で森の中へ引
 入れるのを見た事もあつた。

工程
終る(終へる)

竣工する



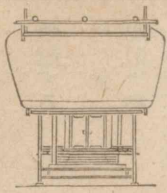
明治神宮全景

かうして、毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて
捗どつて、基礎工事が終り、小屋組
が出来て、殿舎の形の次第に整つ
ていくのが堪らないほど嬉しく
思はれた。

その明治神宮がたうとう竣工
した。嘗て赤い土の露出してゐ
る上に鋭く尖つた切石が幾つも
列んで、烈しい日に光つてゐるの
が見えた處には、今、清々しい色
の小砂利を敷きつめた參道の白
線が、常緑の森の中に長く續き、その以前疎な松林の中から耕

展開する
御料地
森嚴
幽邃

神社建築の一種、
側面を破造とし、
棟より前の軒先ま
でを、後の軒先ま
でより長くし、ま
して、向拜をも併せ
て、覆ふやうに造つた
もの、流破風造。



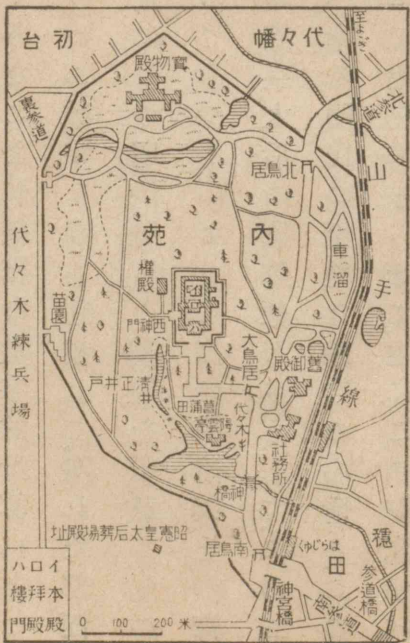
正面



側面

見えつ隠れつ

地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地は、いつの間に
やら、すつかり見違へるほど美しい景色になつて、森嚴と幽邃
の趣を兼備へた鬱蒼
たる密林の中から、謂
はゆる流造素木の神
殿の見えつ隠れつし
てゐるのが、何ともい
へない神々しい感じ
を起させる。



神域！ 眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅
の領土！ 私は、始めて完成した明治神宮の神苑に立つた時、
その改まつた光景を見て、今更の様に強烈な感激に打たれた。

います

幽雅

大正四年

紀元二五七五年

延人員

尺メ

超越する

千載

明治天皇

第二百二十二代、御名は睦仁、明治四十五年(五三三)崩御、御年六十一。

昭憲皇太后

御名は美子、大正三年(五五五)崩御、御年六十五。

二柱

御懿徳

瞭一瞭

何者の力がこの新しい建設の事業を完成させたのだらう。

造營局の記録の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺しゆんじゆめ一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して、隠れた部面に働いた強い力こそ、實にこの明治神宮の基礎を千載不動の固さに築き上げたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖徳と、海よりも深い昭憲皇太后の御懿徳と、さうして、この二柱の大神の御恵に對へ奉る國民の至純な感謝の心情と、この三つのものが、陰に陽に工程を捗どらせて、遂にこの記念すべき大工事を完成するに至らせた原動力であることは、何人も疑ふことの出来ない明瞭な事實である。

苑一園

標的

神宮橋

南參道が省線山手線を跨ぐ陸橋。

嗚呼！ 純粹な至誠の動機から出た青年團員の造營奉仕、百里二百里の遠方から眞心を籠めて輸送して來た無數の獻木。それらは何事を語つてゐるか。實にこの神宮の御苑を形成する一本の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠が籠つてゐるのである。かうして殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇、昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。なんといふ美しい尊い事實だらう。今までの神社に曾て見たことのない明治神宮の特色は、實にこゝに在るのである。私は、表參道を一直線に進んで、神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那に、第一にこのことを直感した。そして、一步々々、美しい小砂利の上を神殿に近く踏入るに隨

肅然たる
肅(聿・八畫)

清冽な

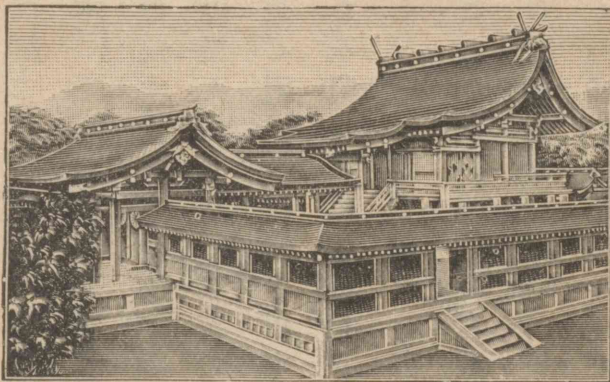
萬成

岡山市内の西北
部、萬成山。

風致

筑波山

茨城県、海拔八七
六米。



明治神宮本殿

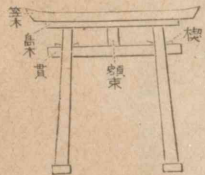
つていよ／＼肅然たる心持になつて、深く襟を搔合はせた。

波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の

參道の兩側には、盡きる事を知らない密林が、何處までも長く續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。鳥居から約一町ばかり奥へ入つて、神橋の處へ來ると、どこからともなく、清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山縣萬成産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を摸した風致のいゝ細流の兩岸、筑

明神鳥居

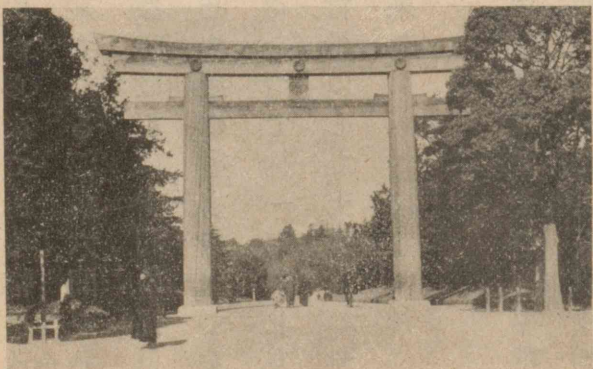
鳥居の形式の一、
柱の傾斜甚だし
く、笠木・鳥木共に
反轉し、額東及び
榎のあるもの。



明神鳥居

楓が、今しも紅葉の影を水面に落して、美しい秋の錦を織つてゐる。こゝは神苑中で、唯一の人工味を加へた處で、神苑の殆ど總べてが、繊細な技巧を排した自然的大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木の斷えた處に、千七百四十といふ驚くべき樹齡を重ねたといはれる、直立六丈餘の臺灣産檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、



大鳥居

原宿
東京市澁谷區原宿町。

幅員

千駄が谷

東京市澁谷區千駄が谷町。

擴大する

土佐繪

平安朝後期の畫家藤原基光を祖とする、濃厚な色彩と繊細な筆致を特色とする大和繪。土佐光信、土佐光起は名手として謳はれてゐる。

檜皮葺

木會

長野縣西筑摩郡。

その高さは三丈九尺に達するとのことだ。

この鳥居のある處は、南方原宿方面から來てゐる幅員八間の南參道と、北方千駄が谷方面から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、こゝから左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて、西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、ぼつと眼界は廣く且明かるくなつて、約一町の北方に、亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした、土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出来る。

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を併せて、その總坪數六百五十坪。本殿は全部木會御料林産の檜材を以て造られてある。近く拜殿に上つて拜すると、芳しい檜の香氣が強くと鼻

おはします
衆庶

何事の

西行法師が伊勢の神宮に參拜した時に詠んだ歌といふ。

かたじけなし

暴露する

を打つて、いかにも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は、即ち、神靈のおはします内々院で、衆庶の漫りに窺ふことを許されない神聖な場所である。

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙

こぼるゝ

私は默禱を終へて始めて向かふを見上げた。

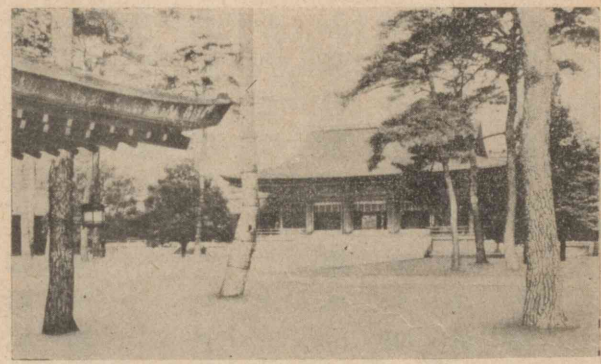
まあ、なんとといふ明かるい快い感じを持つた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、靜寂な、しかし、陰鬱な感じをたゞよはせてゐる中に、この神宮ばかりは、隠すところのない心持で、十分な光線に總べてを解放し、總べてを暴露して見せてゐる。しかも、それでゐて、決

淺薄な

滲透する

蟠る
舊弊

進取的
潤達な



拜殿

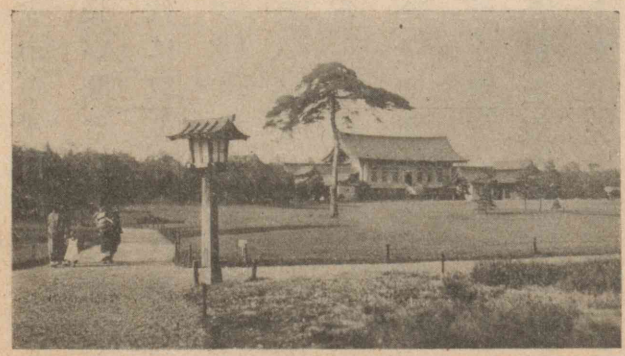
して淺薄な心持はせずに、却つて一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へ様もない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせられる。これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮だといふことが出來ると、私はさう思つた。久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く接觸し、國民と親しく協力して、新文明を吸収しようとお努め遊ばされた明治天皇の活動的、進取的の潤達な御氣象に對して、その明かるといお宮の感じが、いかにもびつたりと呼吸を合

均齊
齊齋

便殿

はせてゐる様に思はれる。拜殿を中心にして左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、さうして、その奥に便殿の遠く望まれる心持、それら總べてが、又、たとしへもない莊嚴美を語つてゐる。

拜殿を下りて、西神門から出ていくと、約一町に互る森林帯があつて、その向かふ、廣く開けた明かるとい視野の中に、目の覺める様な芝生地が一面に緑の色を展べてゐる。嚴肅から快活へ、また、莊嚴から優雅への急轉が其處に見える。こゝらに來る



寶物殿

林苑

と周囲の林苑は著しく庭園風を帯び、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉樹の交つてゐるのが少からず目に著く。

すつと

中古時代
平安朝

寶物殿へ行くまでの道には、ずつと長い間さうした色彩が續いてゐる。寶物殿は形式を中古時代に取り、その材料と建築の方法とを現代に取つた鉄筋コンクリート石張の建築で、

八幡製鐵所

福岡縣八幡市にある。

建坪數實に五百十五坪、これに使用した八幡製鐵所製の鐵材は、約十二萬貫に及んだといはれてゐる。後は一帯の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘を繞つて、若

池塘
塘一糖

若しい楓の樹が美しく植列ねてある。

枳形

私は寶物殿まで來ると、再びもと來た道を表參道の枳形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり、左右兩側にある古雅な木柵を繞らした一構は、即ち明治天皇、昭憲皇太后の深

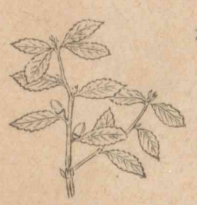
由緒
弄(升)
趣致
點在する
しをらし



熊笹



槲



檜

い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑内の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、いづれも極めて御質素なものばかりであるが、お庭は實に田園の自然の景色そのまゝで、殊更技巧を弄しないところになんともいへない優雅な趣致がある。この御苑は、兩陛下の御在世中、殊に御愛賞遊ばされた處で、高くそびえてゐる松を背景にして、芝生の上に點在してしをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生ひ茂つた小丘の上に連りつゞいてゐる槲や檜の雜木林にも、東京近郊では到底見ることの出來ない野趣がある。

私はこれ等を一わたり拜見して廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので、御門を出た。振り返つて見ると、神殿のあたりは、もうすつかり深い靄に包まれ

明治神宮紀
溝口白羊著、明治
神宮に關するあら
ゆる方面の事が記
述してある、大正
九年（五）十一月
刊行。

て、黒々と晝でも暗いほど生ひ茂つてゐる樹林の中を、かつき
りと切開いたやうに、路線の白い色が暮残つて續いて見える
のが、妙に嚴肅な氣分を起させた。
私の胸には、その神祕な境の中に、ほんのりと浮かんで見え
る素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な
曲線とが、神域を出てからも、何時までも、長く鑄つけられたや
うに残つてゐた。

一草一木の末にも、祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な
幽邃な優雅な神苑よ！ 長い私の一生を通じて、果してこの
深い印象を忘れる日があるだらうか。

（明治神宮紀）

北原白秋

名は隆吉、福岡縣
の人、詩人、歌人、
明治十八年（三四五）
生。

二 明治神宮奉納獅子舞歌

北原白秋

連れ獅子
勢ひ獅子

天津日嗣
皇孫

ここの御苑みほに見申せば、

朝日さし照る宮づくり、

黄金かがやく千木高く。

獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

歌ひはやせや、大御代を、

天津日嗣を、皇孫すのみまを、

さきの帝の大前に。

旗雲

獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

笛や鼓の音も空に、

たたへまつれや神業を、

四方に棚引く旗雲に。

獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

受遊び

舞へや、勇めや、日の本は

窟戸神樂の受遊び、

ほがらほがらで夜も明けた。

獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

鎮め

さても白妙、見わたせば

富士は鎮めの國のやま、

遠つ神代の雪のいろ。

獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

ここは代代木の神宮、

畏れながらにまゐり来て、

ささら拍子もにぎやかに。

獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

廻れ廻れや、ささら舞、

まゐり来て

ささら拍子



つらつらと

納めまつれば菊の香や、
玉の眞砂をつらつらと。

獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

廻れ廻れや、ささら舞、

舞へや、勇めや、かがやかや、

大御寶や、わがどちや。

獅子は連れ獅子、勢ひ獅子。

(白秋全集第八卷)

大御寶

どち

白秋全集

十八卷、北原白秋の昭和八年(二五三)までの全著作を集む、昭和四年(二五二)と九月(昭和九年(二五四)一月刊行、第八卷は歌謡集である。

西尾 實

長野縣の人、國文學者、東京女子大學教授、法政大學講師、明治二十二年(三四九)生。

鋪裝道路

三 生きてた言葉

西尾 實

四月初のある朝、私はいつものやうに電車から降りて、春らしい陽ざしを楽しみながら、ゆつくり學校の方へ歩いて行つた。

途中、公園の櫻並木を通り越して鋪裝道路にさしかゝつた頃、一人の生徒が私の傍を急ぎ足で通り過ぎた。後姿を見ると、まだ制服もま新しい、入學したばかりの生徒である。間もなくまた私の背後から來た生徒が、私を追越さうとして、「お早うございます」と挨拶した。見ると五年生の一人である。すると、さきに私を追越した新入生が、何を思つたか急に立止り、道の左側に直立してゐる。さうして、私が近づくと、脱帽して

「お早うございます。」といふ。私も「お早う。」と挨拶を返した。すると、私の聲の終るか終らない中に、彼は再び語を發して、「先生、私はさつき先生だといふことを知りませんでした。」といつて頭を下げた。「あゝ、さう。」といひながら、思はず私も頭を下げた。先生に對し、學友に對し、必ずはつきり言葉に出して挨拶せよとは、學校の平素の教育である。この新入生も、早速この教育を受けたのであらう。そして、一人の先生に對してその禮を缺いたと氣づいた時、直ちにその氣づいた場所に立止つて待受け、挨拶を果し、さきの缺禮を謝したものとみえる。

考へてみると羨ましい行動である。誰でも、自分のしたことが誤つてゐたと氣づいた時、これ程こだはりなくその非を認め、これ程はつきりとその非を改めることが出來たならば、自

こだはりない

他とともにどんなに幸福になるであらうか。私は明かるくされた心持で學校の門を入つた。

その後も私は時々このことを思ひ出す。さうして、あの少年の一途な顔と、はりきつた聲とをあり、と見聞くやうに感じると共に、「先生だといふことを知りませんでした。」といふ本氣な言葉を思返さずにはゐられない。

實際、かういふ眞實な言葉は、不思議に人の心を明かるくするものである。あの良寛が座右の銘にしてゐたといふ「愛語」の中に、

むかひて愛語をきくは、おもてをよろこばしめ、こゝろをたのしくす。むかはずして愛語をきくは、肝に銘じ魂に

一途な

銘ず。

といつて愛語の力を讃へ、更に進んで、愛語することによつて
愛心を拓くことが出来るといふ意味のことをいつてあるの
も思ひ合はせられる。かく、聞く人の心を明かるくし、言ふ人
の心を拓くやうな言葉こそ、眞に生きた言葉であるといつて
よいであらう。そして、この生きた言葉を實現しゆくことに
よつて、やがては、同じ「愛語」の中の「愛語よく廻天の力あること
を學すべきなり。」といふ言葉の意味をも本當に會得すること
が出来、るやうになるであらう。

廻天の力

國語の學習に於ては、いろ／＼な文を読み、又いろ／＼な文
を綴る。しかし、それに止つて、我々自身の日常の言葉を疎に

したならば、その學習は、畢竟、根のない植物を育てようとする
やうなもので、眞の國語の力を成長させることにはならない
であらう。

我々は、我々の心を育てることによつて、その言葉を力ある
ものにしないで、はならないのは、いふまでもないが、また、日々
刻々の言葉を生きた言葉にすることによつて、心を拓き、いの
ちを向上させてゆかなくてはならない。そして、それが眞に
文を読み、文を綴る上に缺くべからざる基礎であることも覺
らなくてはならぬ。

(國語卷二)

國語

岩波書店編輯部編
中學校用國語教科
書、昭和九年(三三)
四月二十日刊行

藤井紫影

名は乙男、兵庫縣の人、國文學者、京都帝國大學名譽教授、文學博士、明治元年(三五)生。

萬葉集

二十卷、我が國最古の歌集、奈良朝時代の撰、撰者未詳、仁徳天皇の御代から、淳仁天皇の天平寶字三年(四七)まで、凡そ四百四十年の歌約四千五百首が收めてある。

潔癖な

四當 字

藤井紫影

一體當字とは何であるか。嚴格にいへば當字と正字との區別は甚だ立ちにくい。萬葉集の例でいへば、天地、日月をアメツチ・ヒツキとよむが正字で、垣津旗をカキツバタ、管土をツジとよむ類は當字であらうが、丸雪をアラレといふのは、當字とも見られ、さうでないとも考へられる。この種の區別が甚だむつかしい。意字漢字と音字(假名)とを併用する日本文は、どこ迄行つてもこの災厄を脱することができないのである。いかに文字に潔癖な文士でも、當字なしには二行と小説も手紙も書けまい。多年の習慣で當字を正字と心得て使用して居る人も多い。兎角、馬鹿、泥棒、面倒、武骨などは最も廣く

色取り
高を括る
無暗矢鱈に
出鱈目な
兼合ひ
節用集

二卷、著者未詳、日用の熟語諸文字を列擧して註釋した通俗字書、室町中期の編、異本が頗る多い。

變挺な
萬葉の

萬葉集第十二卷所收。

洒落書き
おれ

行はれて居るもので、こんな當字はいけないと言つたら、誰しも忽ち困るであらう。さりとして、どうせ漢字は色取りにまぜるだけの事だ、萬葉流だと思へばよからうなどと高を括つて、無暗矢鱈に出鱈目な文字を滅茶苦茶に使はれても困る。この兼合ひが至極難儀である。假名の發明ができた後も、とかく漢字崇拜の風がつきまとひ、すべての俗語に漢字を當てねば満足しないで、通俗字書たる節用集の類に、變挺な漢字を當ててそれが今日迄及んだ。畢竟語原の明らかでない詞に、よい加減な素人考で漢字を當てるから起つたので、萬葉の馬聲(イ)蜂音(ブ)石花(セ)蜘蛛(クモ)荒蚊(アルカ)と洒落書きした當人が、おれの智慧を見ろとひそかに誇つたであらう如く、フザケを巫山戯、ガタピシを我他彼至と當て初めた人も多分得意で

惡洒落

一概に

梵語

怒號する

耳にもかけない

俗間

語原學

轉訛

あつたらうと想はれる。こんな惡洒落はよして、すべて假名書きにしたらよからうといふ人もあるが、それも場合によつて一概にさうもなりかねる。餘り假名が長く續くとか、強く讀者の目に印象づけようとする時は、どうも漢字でなくては具合がわるい。當字と知つてゐながら、矢張り使はねばすまぬ。馬鹿は梵語から出た語でも、莫迦と書くより馬鹿の方がウツリがよい。ブコツはコチナシ(無骨)から出たにせよ、それでは海鼠の樣で武骨らしく見えない。語原學者がいかに怒號しても、一般民衆は耳にもかけないであらう。俗間には俗間の語原學があつて、メンクラフは目昏ム(めくら)の轉訛だといふよりも、擊劍でなぐりつけられて面喰つたのだと説く方が、却つて人氣があつて信用され易い。メンドウは目遠(めとほ)イで見るを

耳遠い

神經を尖らせる

振假名

象形的

合點のいく

文藝春秋

菊地寛主宰の月刊
文藝雜誌、本課は
その大正十五年三
月十一月號より
採つた。

厭ふ意より起つた詞で、現に醜いことをメンDOIといふ地方もある。併し、これは一般民衆には耳遠い感を起さすことであらう。何れにせよ、普通使用する漢字の使ひ方といふものは、餘り正確なものではないのだから、餘り神經を尖らせぬがよい。さうかと思ふと、又一方では、近頃日の字に陽を使ふことが文士連の間に流行して、わざ／＼振假名つきで短歌などに盛に用ひられる。日の方が象形的でもあり、字畫も少くて便利なのに、妙な事がはやるものだ。思ふに日は一日二日といふに紛れ易いとの心配から來たのであらうが、それなら陽も太陽と限つた事ではない、廣く陰陽の意味にも使はれるではないか。また、平常の意味なる不斷を普段と書く小説家の多いのも合點のいかぬ事である。

(文藝春秋)

夏目漱石

名は金之助、東京市の人、英文學者、小説家、大正五年(一九一六)歿、年五十。

草鞋



屈託氣に

文久錢



と、聲を掛けたが返事がない。軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立切つてある。向かふ側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇からつるされて、屈託氣にふらりと揺れる。下に駄菓子箱の箱が三つばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい。」と、また聲を掛ける。土間の隅に片寄せである白の上にくれて居た雞が驚いて眼をさます。くゝゝ、くゝゝと騒ぎ出す。敷居の外に土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてる上に、眞黒な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か、銀の

五峠の茶屋

夏目漱石

床几



狗一犬

柘

とぐる

悠長に

茶釜かわからない。幸ひ、下は焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずつと這入つて床几の上へ腰を下した。雞は羽搏きをして臼から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めてなければ奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこつと言ふと、雌が細い聲でけつこつこつこつと言ふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。床几の上には一升柘程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐるを捲いた線香が、日の移るの知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に収る。

しばらくすると奥の方から足音がして、煤けた障子がざらりと開く。中から一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えて

暢(目)

居る。菓子箱の上に錢が散らばつて居る。線香は暢氣に燻つて居る。どうせ出るには極つて居る。しかし、自分の店を明放しても苦にならないと見える所が、少し都とは違つて居る。返事がないのに床几に腰をかけていつ迄も待つてるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎なお天気で、嘸お困りでござんしよ。お、〱、大分お濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し燃やしつけてくれ、ば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

生憎な
嘸
ござんしよ (ござ
いませう)
上げましよ (上げ
ませう)

碗―椀―腕
刳拔盆
無造作に

うづくまる

閑静

「へえ、只今焚いて上げます。まあお茶を一つ。」
と立ちあがりながら、しつゝと二聲で雞を追下げる。こゝこゝと駈けだした雌雄は、焦茶色の壘から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛びだす。

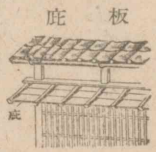
「まあ一つ。」

と、婆さんはいつの間にか、刳拔盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼附けられてある。

婆さんは袖無しの上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。自分は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら話をしかける。

「閑静でいゝね。」

颯と
寒から(寒からう)
痕跡



漱石全集

十四卷、夏目漱石の全著作を集む。大正七年(三三〇)大正十四年(三五五)刊行、別冊一卷、大正十四年(三五五)七月刊行。

草枕

小説、明治三十九年(三五六)九月、「新小説」に發表せられたもの。

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。こゝら邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、なほ聞きたい。」

「生憎今日は先刻の雨で何處へか逃げました。」

折柄竈のうちが、ばち／＼と鳴つて、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹出す。

「さああたり。嘸お寒から。」

と言ふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに微な

痕をまだ板庇にからんで居る。

(漱石全集第二巻 草枕)

横光利一

大分縣の人、小説家、明治三十一年(三五〇)生。四月二十一日、昭和十一年(三五六)。

巴里

パリ、フランスの首府、フランスの北方、セイヌ河に跨る。

峡谷

拔路

丈

一丈は約三・〇三〇三米。

ガソリン

揮發油

戴して

六巴里通信

横光利一

四月二十一日 巴里の建物は高さか同じで六階だが、どの建物も煤けて黒い。道路を歩いてみると峡谷の底にあるやうだ。道路以外に拔路はないから、廣場に出ない限り、一丈ほどの厚さで押流れてゐるガソリンの底を歩いてゐるやうなものだ。

×

建物も彫像も大理石に似た石灰岩であるから、風雨を受けると突出した部分は白く雪を戴いてゐるやうに美しい。つまり街の薄黒く煤けてゐるのは、反對に白い部分を明瞭に浮きたゞせる背景の役をしてゐるのだ。そこにマロニエの街路

重厚な

サンジェルマン
詳しくは、サン・
ジェルマン・アン・
レエ、巴里の西郊、
避暑保養地、有名
な古城がある。

モンマルトル
巴里の北部の高
臺。
サクレクール
「聖心」と譯す、教
會堂である。



花の エニロマ

樹があるが、これは花より葉の方が美しい。この葉の群生の仕方は、重厚な建物の線と如何にもよく調和してゐる。

×
四月二十三日 サンジェルマンへ行く。サンジェルマンは高臺で、六軒彼方にある巴里の街の緩な起伏が一望の中に見渡される。林檎の花盛だ。遠くモンマルトルの頂上のサクレクールが微に春霞の中に浮かんでゐる。林檎の花の下

セーヌ河
佛蘭西北部の大
河、巴里を貫流し
英吉利海峡に注
ぐ、全長約七六四
浬。

蛇行する
銃眼
蜿蜒と
フランソワ一世
佛蘭西國王(西曆一
四四一—一五七)

ハイカラ
高襟、氣取つた服
装、轉じて當世風、
英語。
ブローニーユ
巴里の西郊、大森
林公園。
コーヒー
珈琲。

を蛇行してゐるセーヌ河は、古城の銃眼を高く一方に聳えさせ、蜿蜒と巴里に向かつて流れてゐる。風はうすら寒い。フランソワ一世の宮庭の中を突きぬけて行くと、小梅櫻が早くも満開を過ぎてゐる。庭園の中に英吉利風の庭がある。佛蘭西の王朝時代には、英吉利風の庭はいかにもハイカラに思はれたに違ひない。

×
四月二十八日 H君・O君と三人で、ブローニーユへ午後から行く。市中に九百ヘクタールの大きな森を残しておいた市民は、この森のために心は絶えず洗はれてゐるのだ。森の中はマロニエの花盛だ。コーヒーを飲んでゐる茶碗の中へ花が舞落ちて来る。夕暮になつて歸らうとして立上つた。鶯が衰へた聲で濃密な葉の中で鳴いてゐた。

モーパッサン
佛蘭西の小説家
(西曆一八五九—一九一三)

ボードレール
佛蘭西の詩人(西
曆一八一九—一八七〇)

散文家

×

五月一日 曇つてゐる。風邪氣味だ。
午後始めて宿の前の廣い墓場の中へ行つてみた。モーパ
ッサンの墓がある。花の落ちた薔薇が墓石に伸上つてゐる
外に、名の知れぬ穢い花が咲いてゐる。誰でも死ねばかうか
と思ふ外に、急に作家の苦しさが身に滲んで、急いでその傍か
ら遠ざかつた。次には、行くまいと思つたボードレールの墓
の前へ出て了つた。このボードレールの石像はよく出来て
ゐるので有名だが、私はその姿勢が嫌である。顎を支へて前
方を睨んでゐる格好は、散文家ならしない。陰鬱な樹木の下
蔭に寝像もある。併し私には、裏の石堀に滲んでゐる鐵鑄の
方が、遂に彼の詩を讀む思がした。

×

五月二日 私は、どういふものだから、まだ巴里に来て、如何な
る意味に於ても、^{こは}恐いと思つたことは一度もない。日本には
確に我々をして何にも恐れさせないものがあるのだ。それ
が何かとこの頃考へてみてゐるのだが、明瞭な像はまだ捉へ
られぬ。

私は日々外國人ばかり押しひしいてゐる中に浸つて、ぼん
やり周囲の顔を見てゐるが、恐れる何物も感じたことはない。
眞似するものが日本にはなくなつて來てゐるのだ。薄黄色
い皮膚の色の美しさは、白色の中に混つてゐると、濛い銀のや
うに見えることも、たまにはある。低い體軀も、それに物言ふ
他の高い上體を屈ませるところ、粘り強く根を張つた松に見
えることもある。

(歐洲紀行)

歐洲紀行

横光利一著、歐洲
旅行の紀行日記
集、昭和十二年三
月、四月刊行。

荻原井泉水

名は藤吉、東京市の人、併人、明治十七年(五十四)生。

山 裾

山 莊

作者が滞在した香川縣小豆島の知人の別莊。

お遍路

四國八十八箇所

弘法大師

讃岐國(香川縣)の人、眞言宗の開祖、承和二年(四三)寂、年六十三。

靈 場

遍歴する

小豆島

瀬戸内海に在る島、香川縣小豆郡。

七 お遍路さん

荻原井泉水

りんく〜といふ冴えた音が、遙の山裾からこの山莊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。――「お遍路さん」とは何といふ親しみ深い言葉だらう。――四國八十八箇所に残された弘法大師の靈場を遍歴して歩くのが、お遍路さんである。併し、如何に信仰のためとは言へ、四國を一周することは日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として、大抵の事ではないので、四國の代りに、この小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積み得る事とされてゐる。「島四國」といふ言葉も出來てゐる。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝるといふ事である。岡山

功 徳

土 庄 港

小豆島の西岸にある港。

菅 笠

塔 婆

先 達

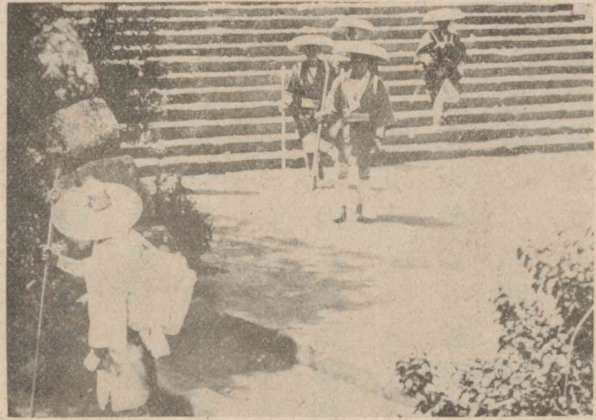
長 閑 に

比 較 的

から、若しくは高松から來るお遍路さんは、多くは船で、土庄港とじやうに著く。そこから發足して第何番といふ札所の順に參詣の道をとどるのである。菅笠をかぶり、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱をつるして、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、少いのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀の様な海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の道をたどつて行く。それは繪である、美しいことである。この山莊にまで聞えるりんりんと冴えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑に、路を歩くのに好い氣持であり、又、農事も比較的ひまな四月頃、一番多く見受けると言ふ事だ。この頃、島に著く船は、日に何百人といふ

大師
弘法大師のこと。
教門

扶助する



お遍路さん

お遍路さんを渡して来る。一體、遍路といふものが、何時の時代から始つたものかは知らないが、大師の教門を弘くする上からいつても、各自の信心を篤くする上からいつてもよいことだと思ふ。そればかりではない。お遍路さんはいたる所で愛せられる、又恵まれる。お遍路さん同志も亦お互に遍路であると云ふことのために信頼する、又扶助する。是が實に善い事だと思ふ。未知の人達の道連になつて親しんで行く、路を教へ合ひ、足らぬも

紛失する

参する

遍照金剛
空海の灌頂號。
讚仰する
欺瞞

のを足合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。決して紛失しないといふことだ。是は遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繋がつてゐるといふ意識から来るのだ。此の道に参するには、知識も修養も資格も、そんなものは何もいらぬ。婆さんでも娘でも男でも子供でも、たゞ一つの道を信ずる事に依つて、この尊い心持に一致することが出来るのだ。「南無大師遍照金剛」と讚仰する聲が出て来るのだ。是は實に美しい事だ。争鬭と欺瞞とに満ちたこの社會の中にあつて、信頼と扶助とに心を合はせて行き得る事ほど、美しい事が他にあらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは繪としてのみ美しいのではない。彼等が愛し合ひ、信じ合ふ事に生きるが故に

負うて

暗示

山水巡禮
荻原井泉水著、旅
の隨筆集、昭和五
年(一九五〇)九月刊行

美しいのである
而して、此のことは獨り彼等お遍路さんの土の事のみでは
ない。私達は皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばな
らぬ物を負うて、自分の名を書いた札を撒散らしながら、自分
自分の路を遍歴してゐるのである。しかも、私達の周圍には、
このお遍路さんに見る様な信頼と扶助とが、果して行はれて
ゐるだらうか。——私は思ふ、私達はこのお遍路さんに學ばね
ばならない。遍路といふ行事をのこした弘法大師の暗示を
感じなければならぬ。而して、人間の悉くがお遍路さんの
心を心とするまでに到らなくとも、私達はまづお遍路さんの
信と愛とを以て、人生を歩きたいものである。

(山水巡禮)

佐佐木信綱

家號は竹柏園、三
重縣の人、歌學者、
文學博士、文化勳
章拜受者、明治五
年(一八七三)生、

「いよこせ」
伊勢音頭の囃子。

老舖

老(老)

本居舜庵
宣長、舜庵はその
號、伊勢國(三重縣)
の人、國學者、享和
六年(一八二六)歿、年
七十二。

華客

華(華・八畫)

しなされた

岡部先生
賀茂眞淵の敬稱、家
通稱岡部衛士、家
居を縣居と號す、
遠江國(静岡縣)濱
松在岡部の人、國
學者、歌人、明和
六年(一八二五)歿、年
七十三。

八松坂の一夜

佐佐木信綱

時は夏の半ば、「いやとこせ」と長閑やかに唄ひつれて行くお
伊勢參りの群も、春先ほどには騒がしからぬ伊勢松坂なる日
野町の西側、古本をあきなふ老舖柏屋兵助の店先に、「御免」とい
つて腰をかけたのは、魚町の小兒科醫で、年の若い本居舜庵で
あつた。舜庵は醫師を業としては居るものの、名を宣長とい
つて、皇國學の書やら漢籍やらを常に買ふこの店の華客であ
るから、主人は笑ましげに出迎へたが、手を打つて、「あゝ残念な
ことをしなされた。あなたがよく名前を言つておいてにな
つた江戸の岡部先生が、若いお弟子と供とを連れて先ほどお
立寄りになつたのに。」と言ふ。舜庵は、岡部先生がどうして此

曰 安

徳川宗武、徳川吉宗の第二子、明和八年薨年五十七

逗留

一行



賀茂真淵

處へ。」といつものゆつたりした調子とはまるで違つて、あわただしく問ふ。主人は、何でも田安様の御用で山城から大和とおまはりになつて、歸りに參宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋へお著きになつたところ、少しお足に浮腫が出たとやらで御逗留、今朝はもうお宜しいので、御出立の途中、何か古い本はないかと暫くお休みになつて、參宮にお出かけになりました。」それは残念なことである。どうかしてお目に懸りたいが、「跡を追うてお出でなさいませ、追附けるかもしれないませぬ。」と主人がいふので、舜庵は一行の様子を

大急ぎで聴取つて、跡を追つた。

湊町平生町、愛宕町を通り過ぎ、松坂の町を離れて次の宿なる垣鼻村まで行つたが、どうもそれらしい人に追ひつき得なかつたので、すごくと我が家に戻つて來た。

數日の後、岡部衛士は伊勢の神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮再び松坂の新上屋に泊つた。「若し歸りにまた泊られたなら、どうか知らせてもらひたい。」と頼んでおいた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得た。樹敬寺の塔頭なる嶺松院の歌會に赴いて、今しも歸つて來た彼は、取るものも取敢へず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷は二十五、その弟の春海は十八の若盛で、早くも別室にくつろいでゐた。衛士は一人、行燈の下に舜庵を引見した。

垣鼻村

三重縣飯南郡

二見が浦

三重縣度會郡

鳥羽

三重縣志摩郡、日和見山は鳥羽の東北の小丘、現、日和山

塔頭

村田春郷

村田春海

江戸の人、國學者、明和五年歿、年三十

引見する

くつろぐ

江戸の人、國學者、歌人、文化八年(二四七二)歿、年六十六

引見する

くつろぐ

有徳公
徳川吉宗
嘖々たる

眉宇

遊學する

晉に……のみで
ない

契沖

俗名は下河空心、
江戸時代前期の國
學者、元祿十四年
(一七二九)歿、年六十
一。
蘊蓄

賀茂縣主眞淵通稱岡部衛士は當年六十七歳、その大著なる冠辭考萬葉考なども既に成り、將軍有徳公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として其の名嘖々たる一世の老大家である。



本居宣長

此の老學者に相對して居る本居舜庵は、眉宇の間に迸つてゐる才氣を溫和な性格に包んで居る三十四歳の壯年。しかも、彼は二十三歳にして京都に遊學し、醫術を學び、二十八歳にして松坂に歸つて醫を業としてゐたが、京都では晉に醫術を學んだのみでなくして、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。

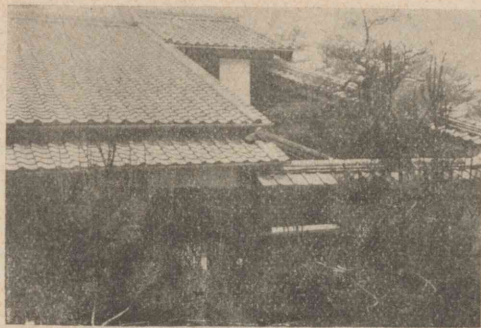
欽慕する
ゆくりなし

舜庵は長い間欽慕してゐた身のゆくりなき對面を喜んで、豫て志してゐる古事記の註釋に就いてその計畫を語つた。老學者は若人の言を靜かに聞いて、懇にその意見を語つた。

「我も固より神典を解き明らめんの志があつたが、それには先づ漢意かみじを清く離れて、古の眞の意こころを尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の言ことばを得た上でなければならぬ。古の言を得んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それ故、専ら萬葉を明らめてゐた間に既にかく年老いて、残りの齡いくばくも無く、神典を解くまでに至ることを得ない。御身は年も若くゆくさきが長いから、怠らず勉めなば、必ず成し遂げられるであらう。しかし、世の學に志す者は、皆低い處を経ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊がある故に、低い處をさへ得ること

が出来ぬのである。此の旨を忘れず心にしめて、先づ低い處をよく固めて、さて高い處に登るがよい。」と諭した。

夏の夜は早くも更けて、家々の門の皆とざされ果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてりした若人は、さうでも今朝から曇り日の闇夜の道のいづこを踏むとも覺えず、中町の通りを西に折れ、魚町の東側なる我が家の潜戸をはいつた。隣家なる桶利の主人は律義者で、いつも遅くまで夜なべをして居る。今夜もとん／＼と桶の箍を入れて居る。時にはやかましいと思ふ折もあるが、今夜の彼の耳には何の音も響



本居宣長住宅

面ほてり

律義者

桶の箍



かなかつた。

舜庵はその後に江戸に便を求め、翌十四年の正月、村田傳藏が中に入つて名簿をさゝげ、うけひごとをしるして、縣居の門人録に名を列ねる一人となつた。爾來、松坂と江戸との間、飛脚の往來に、此は問ひ、彼は答へた。門人とはいへ、その相會うたことはわづかに一度、たゞ一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を去る百六十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯高郡松坂なる新上屋の行燈の光は、その下に語る老學者と若人とを照らした。しかもそのほのぐらい燈火は、實に我が國文學史のうへに不滅の光を放つて居るのである。

(賀茂眞淵と本居宣長)

村田傳藏
春海の幼名
名簿
うけひごと
飛脚
相會うた

寶曆十三年

後櫻町天皇の御代の年號(四三三)。

賀茂眞淵と本居宣長

佐佐木信綱著、賀茂・本居の二大國學者の傳記・學問に關する論文集、大正六年(二五七)五月刊行。

金田一京助

盛岡市の人、言語學者、アイヌ語研究家、文學博士、東京帝國大學助教、明治十五年三番三生。

大泊

樺太亞庭灣に臨む港市。

敘事詩

傳承する

方言

實證する

版圖

單身

九心の小徑

金田一京助

樺太の南半分が、三十年振りて日本へ還つた、その喜のまだ
新な頃、露艦ノールウィックの巨體が、大泊の港口に坐礁したまふ、
まだその殘骸を半ば波の上に暴してゐる頃だつた。

樺太アイヌ語は、北海道アイヌ語とどれ程違ふか。樺太アイヌはどんな物の言方をしてゐるか。アイヌ特有の敘事詩が、若しや其處にも傳承されてゐはしないか。今まで抱いてゐたアイヌ語學上の疑問とその解決とが、この方言に照らして、若しや實證することが出来るのではあるまいか。かういふ空想がいつばいに私の心を占めて、夢にまで見る誘惑となり、たうとう歴史的思出の多いこの新版圖へ、單身踏査を思ひ

小樽

北海道日本海岸小樽灣に臨む港市。

オチヨボッカ

富内郡富内村字落帆。

なまじひに

民政署

明治三十八年三月、悪軍政の下に設置され、同四十年樺太廳が置かれて廢止された。

立つに至つたのである。

それは明治四十年の夏のことである。小樽を立つたのは七月の十二日、樺太の奥山には、木立に交つて山櫻がちら／＼咲いてゐる頃であつた。大泊に船待をし、毎日濃霧を託ちながらしびれを切らして、やつと米と味噌とを用意して、役所の見巡りの小蒸氣に乗せて貰つて、目指す東海岸へ船出をしたのは十二日目。それでも海の上はまだ霧が深く、三晩船の上
に寝て、二十七日の朝、やつと本船のボートで送られてオチヨボッカのアイヌ部落へ最初の足跡を印したのである。

思ひに思つて遙々尋ねて來たものの、部落の人に取つては、私など何處からか迷つて來た犬ころ程の興も惹かない存在だつた。なまじひに、民政署の船に乗つて來た洋服姿は、意地

皆目
片言隻語

がらんどうに



入墨・耳環

悪な役所の看守人でもあるかのやうな印象をさへ與へて、ともすれば一寸疑深い目を光らせ、私の行く所、立つ所、誰もみな背をむけてしまひ、口をつぐんでしまふ。笑ひさゝめいてゐた者も笑を納め、寄合つてゐた者も散じてしまふ。その淋しさは譬へやうもない。皆目言葉が通ぜず、片言隻語も採集出来ずに、空しく一日が暮れてゆくのである。

役所の船から下りたものだから、居る處だけは、酋長の冬期の住家をがらんどうに明けて、一人ぼつねんと居させてくれたのである。又、三度々々の食事は、同じ様に髪を垂した入墨の娘が来て、だまつて私の米と味噌とを小鍋へ入れて持去つて、一時間もすると、温い飯と汁とを作つて来て、黙つて置いて行つてくれる。但し、物を言ひかけたら最後、ぐんぐん逃げて

行つてしまふ。晝のうちには、まだ繪に描いたやうなアイヌの姿を、眼のあたり見てゐるばかりでも慰めになつたが、夜になつて、鼻をつままれるのも知らないやうな闇の中に、磯うつ浪のざあと退いて行く侘びしい音のみを聞いてゐると、物言ふ相手もない淋しさが込みあげて、啞の上に盲にさへ生まれて來たかのやうな寂寥を感じた。

二日目も同じやうに暮れ、三日目も又それを繰返さなければならなかつた。四日目の事だつた。淋しさは、もはや單なる淋しさではなく、東京を發つて一箇月、遂に何の得る所もなく歸らなければならぬのだらうかといふ不安と憂悶が頭をかき亂して、茫然として屋外に立つた丁度その時——ふと見ると、後に子供達が何か喚きながら無心に遊んでゐる。行く

ともなく、その方へ引寄せられて行つたのは、言葉の一はしても拾ひたかつたからである。じつと耳を傾けるが、何といふ發音だらう、しやつくりしながら物言ふやうな喚きやうで、ひと言も耳に止らない。但し、子供だけに、私が近く立つても、別して氣にもせず、夢中に囀つて遊んでゐる。ふと、その一人の腰に下つてゐる小刀に觸つて、北海道アイヌ語で「それは何なの。」と尋ねてみた。子供等は一齊に私の顔を見た。と思つたら、一度にわつと噤し立てて、蜘蛛の子を散らすやうに逃散つた。「通じないかな。」と獨りつぶやきながら途方に暮れてゐると、又三々五々集つては何か大聲に喚きながら遊ぶのである。又寄つて行つた。今度は言葉を換へて、一人の子の耳に下げた環を指して、「何といふものか。」と問うてみた。又、振返つて全

唐子

し。よう事なしに

目ざとい

年かさ

部の子供が私を仰いだが、「なに言つてやがる。」といつた調子に、「わあ！」と喚いて逃出した。

子供等の内に、繪に見る唐子のやうな著物——多分滿洲方面からの外來品——を著てゐるのが一人あつた。その恰好が一寸面白かつたので、單語を採集する筈の手帳へ、し。よう事なしに、その子を寫生し始めた。

私が、その子を見ては鉛筆を動かし動かしするのを目ざとく見つけた子供の一人が、先づ何とか喚いた。他の子も私を見て、又何とか喚いた。遊ぶのを止して、みんな私を注視した。眞先に見つけた子が、まづ怖々と、しやがんでゐる私へ近寄つて來て、物珍しげに私の描くのを覗いた。忽ちどや／＼とやつて來て、みんな覗いた。年かさのが、唐子の服裝をした子

を指して、「お前が描かれたぞ。」とでもいふやうな様子をした。すると、「わい／＼」と言出して、私の横から覗くもの、背後から覗くもの、中には無遠慮なのが、指を突きだしてもう私の畫面を突ついて、「こゝが頭で、こゝが足だ、手だ。」などと言ふやうに、自分の發見を得意になつて、説明を引受けてゐるのさへある。がちつともその言ふ事が聞きとれない。

その時だつた。ふと思ひついて、一枚新しい所をめくつて、誰にもすぐ解るやうに、大きく子供の顔を描いてみた。目を二つ並べて描くと、年かさのが一番先に「シシ」「シシ」と言つた。他の子も「シシ、他のも「シシ、とうとう差覗いてゐた子の口が皆「シシ！」「シシ！」「シシ！」「騒がしいといつたらない。その状は丁度「目だよ、目なんだよ。」「うん、目だ。」「目だ！目だ！」とでも

言ふやうに聞えたのである。

さうだ、北海道アイヌは目をばシクと言ふ。樺太ではそれをシシと言ふのかも知れない、といふことが頭へ閃いた。急いで畫の目から線を横へ引つばつて、手帳の隅の所へ shish と記入し、それから悠々と鼻を描いていつた。年かさの子が鋭い聲で「エトウプイ！エトウプイ！」と叫ぶ。と、残りの子等も聲々に「エトウプイ！エトウプイ！私をかしくなつたのを泳へて、又鼻の尖端から線を引いていつて、その端へ etu-pui と書込んだ。そして、口を描いてゆくと、やつぱり年かさの子を眞先に「チャラ！」「チャラ！」「チャラ！」と大騒ぎ。眉を描くと、「ラル！」「ラル！」「頭を描くと、「サバ！」「サバ！」「耳を描くと、「キサラプイ！」「キサラプイ！」

忽ちの内に、肢體の名が十數個期せずして採集が出来た。をかしいやら、愉快やら。かうなつたら、もう何でもない。向かふから競つて言つてくれるのだから。

たゞ私は「何？」といふ一語が欲しくなつた。それさへ解れば、心の儘に、物を指して、その名を聞くことが出来るのである。そこで、ふと思ひついて、もう一枚紙をめくつて、今度は滅茶苦茶な線をぐるぐるぐるぐる引廻した。年かさの子が首をか上げた。そして「ヘマタ！」と叫んだ。すると他の子供も皆變な顔をして、口々に「ヘマタ！」「ヘマタ！」「ヘマタ！」。

うん！ 北海道で「何」といふことをヘマタと言ふ。これだと思つたから、まづ試みよう、と、身のまはりを見廻して、足もとの小石を拾つて、私からあべこべに「ヘマタ？」と叫んでやつ

撈(巻)

た。驚くべし、群がる子供らが私の手元へくるくした目を向けて、口々に「スマー！」「スマー！」と呼ぶではないか。北海道で石のことをシマといふ。してみると、スマは石のことで、さうして、ヘマタはやつぱり「何」といふことに違ひなささうだ。

そこで勇氣を得ても一つ、足許の草を手に撈り取つて「ヘマタ？」と高く捧げると、子供達は「ムン！」「ムン！」「ムン！」とびよんびよん跳びながら答へる。私は嬉しさに、子供等と一緒にびよんびよん跳んで笑つた。

をかしかつたのは、私が自分の五厘位しかない七八本の顎鬚を摘まんで見せて、「ヘマタ」と尋ねた時である。聲に應じて、子供等は「ノホキリ！」「ノホキリ！」と答へてくれたので、Nohkiri「顎鬚」と記入した。何ぞ知らん、それは「下顎」だつた。髯面に馴

鬚(髯)

れてゐる子供達の目には、私の摘まんだ鬚などは「鬚」の數に入らないので、私の指は「鬚」を摘まんでゐると思つたのである。

私はかうして、忽ちの内に、七十四箇の單語を採集して元氣づいた。折柄、河原に集つて鱒を捕へてゐる大勢の大人達の所へ下りて行つて、覺えたばかりのほや／＼の單語を勇敢に使つてみた。河原の石を指しては「スマ」と呼び、青草を指しては「ムン」、鱒を見ては「ヘモイ」、鱒の頭を指しては「ヘモイサバ」、鱒の目を指しては「ヘモイシシ」、鱒の口を指して「ヘモイチャラ！」

これまで、むづかしい顔ばかりしてゐた髯面が、もじや／＼の髯の間から白い齒を現した。これまでそむけ／＼してゐた婦女子の顔にも、眞青な入墨の中から白い齒が見えた。明らかに皆笑つたのである。中には向かふから、網を持つてゐ

禁園

渠成つて水到る

驀地に

る手を振つて見せて「ヤー(網)」と言つたり、砂地を指して「オタ(砂)」と言つたりしたものもある。急いで手帳に書きつけながら、その發音を眞似すると、不思議さうに手帳を見に寄つて來るものもあつた。婦女子の群では、「何時覺えたらう」とか、「よく覺えたものだ」とかいふらしい感歎の聲をあげたものもあつた。かうした間に、私と全舞臺との間を遮つてゐた幕が、いつべんに切つて落されたのである。さしも越え難かつた禁園の垣根が、急に私の前に開けたのである。言葉こそ固く鎖した心の城府へ通ふ唯一の小徑であつた。渠成つて水到る。茲に至つて、私は何物をもためらはず、總べてを捨てて驀地まっしぐらにこの小徑を進んだ。

一週間の後には、一寸私が顔を出しても、右から左から言葉



蝗

語彙 家苞 北の人
金田一京助著、アイヌ語研究に關する隨筆を集めたもの、昭和九年(二五)四月刊行

を投げられる。朝起きて河原へ顔を洗ひに手拭タオトルを下げて通ると、兩側のアイヌ小屋から、「どこへ行きますか。」「どうしたんですか。」などと、まるで田圃の蝗ワカが飛出すやうに、ばた／＼と飛出して来て言葉を懸け、私が旨く答へられたといつては笑ひ、とんちんかんに答へたといつては笑ひ、顔を洗つてゐると、もう子供達が起きて後へいつぱいやつて来てゐる。夜は、さしもがらんだうな私の宿も一杯になつて身動きもならない程、若い者や年寄が詰めかけて、踊る、歌ふ、喋る。
四十日の滞在の後に、大抵の話は支障なく出来るやうになつた上、樺太アイヌ語文法の大要と語彙と、北蝦夷古謠遺篇三千行の敘事詩の採録を家苞に、私は生涯忘れがたい思を残してこの部落の老若に別れを告げた。
北の人

齋藤茂吉

山形縣の人、歌人、醫學博士、明治十五年(二五)生。

一〇 雜 草

齋藤 茂吉

こゝの庭には、昨年昨年から雜草が思ふ存分にはびこつてゐる。昨年の春は草がまだ小さい時分に幾らか除いたが、今年今年は手が足りないのて、たゞ延びるに任せるより仕方がなかつた。七月に入つたころには、もう雜草は延びられるだけ延びた。さうして、花を持つ前の油ぎつた光を見せ、僕の脊丈の没するまでの高さ高さに達した。

雜草といつても、僕がその名前を知らぬものが多かつた。併し、いろ／＼の草の生える有様を見てゐると、暇暇の無い僕僕のやうな者の心をも惹く點が一つ二つはあつた。燒跡焼跡に立てた風呂風呂の歸りなどに、僕は幾らか落著いた氣持になつて、雜草

數でこなす

假令

やましるぎく



犬蓼



金線草



のどん／＼延びて行く有様を見てゐることがあつた。

春の初に萌出でた「あかぎ」は、數でこなして無數に生えた。

その柔な時分にはよく茹でて食つたが、やがて丈も延びて行つて、ほかの雑草の領分をも侵す勢を示した。「あかぎ」は假令他の雑草のなかにあつても、滅びない草だと僕は思つた。

それから、咲いた花を見ると、菊科植物で、多分「やましるぎく」ではないかと思はれるのが、無數に生えた。この草もいつの間にか僕の脊丈を超越し、小さい白い花が澤山咲いてゐるのを見ると、如何にも繁殖力の強いことを思はせた。それらの間に生えてゐる、犬蓼だの、金線草などは、極めて弱々しい幽な花のやうに見える。「どくだみ」なども一時強いはびこり方を示したが、今はさういふ丈の高い雑草の下蔭になつてしまつ

どくだみ



竹煮草



ひめむかしよもぎ



てゐる。その間に葉の大きい竹煮草の繁りがまた一段と目立つて見えてゐる。併し、これは株の数がさう多くはない。さういふ草の中に立交つて、數も多く、丈もどん／＼延びて行く草があつた。これは春先には葉の柔かくかはゆらしい草として、すさまじい焼跡に一種の風致を添へてゐるのであつたが、春も更け、初夏になり、夏も真中に近づく頃は、ほかの雑草を壓迫する勢を示して行つた。さうして、尖端の方に細かい枝が出て、無數の小花を著けようとしてゐる。

風呂の歸りなどに、僕はこの草の前に突立つて、一體何といふ草だらうと何時も思ふのであつたが、計らずも、僕のところの事務員がこの草の名を知つてゐて、「ひめむかしよもぎ」といふことを教へてくれた。その事務員は少し俳句をやるから、

歳時記

俳句の歳時記などにはもう出てゐるのであらうか。

舶來する

それからちよつと書物を調べると、成程この草の名が出てゐる。この草は近世舶來して來たもので、鐵道草、御一新草、明治草などともいふと書いてある。さうして、非常な勢で殖えることもまた書いてある。僕は、この草が外國から渡つて來て、傳來の雜草を壓迫してゐる有様を見てゐたのである。遙と海を渡つて來て、異境に根をおろさうとするものには何か猛烈な強いところがある筈である。また異境といふ一つの要約が既にこの根強さを強めさせることもあり得るのである。

異境

要約

流行病がさうである。流行しはじめた時には、その黴菌の繁殖力は非常に強い。それなら、いつまでもその猛烈の度を

牽制する

保つてゐるかといふに、事實はさうではない。そんなことを考へてみると、今幾年か経つうちには、「ひめむかしよもぎ」の繁殖力も衰へるかも知れぬ。さうして、傳來の雜草が、今は異國草の下草の形になつてゐても、追々は、二たびその異國草を牽制して、その繁殖をさう恣にはさせないかも知れぬなどといふ空想も浮かんで來て、五分や十分の時は経つてしまふ。さうして、風呂あがりの汗も乾くのである。

眞夏も過ぎて、馬追の鳴く頃になると、脊の高いのも低いのも、花を著け實を結ぶやうになる。さうすると、雜草の風趣は全く變つて來て、油ぎつたやうな色調はもう見られなくなる。

(念珠集)

油ぎつた

念珠集

齋藤茂吉著、隨筆集、本篇は小品集に收められてゐる。昭和五年(三五)八月刊行。

新井白石

名は君美、將軍徳川家宣の侍講、享保十年(三十八)卒、年六十九。

わが父

正濟、久留里(千葉縣)侯土屋利直に仕へた、新田氏を祖とする。

致仕

おくる

遺領

戸部

コブ、コホウ、民部省の唐名、久留里侯をその官名によつて呼んだもの。

打刀

氣色

腰刀

誅す

さぶらふ

さん候

二 蚊

新井白石

わが父致仕の後、事にふれて宣ひたりしには、「蘆澤といひしものは、幼き時に父におくれしを、其の父の遺領賜うて近く召使はれしに、それが二十歳ばかりに及びし比に、我を召す事ありて参りしに、戸部は物に腰かけて、打刀を横たへておはします。其の氣色常にかはりぬと思ひしに、「近くまゐれ」とありしかば、腰刀をとりて参らんとせしに、「そのまゝに参れ」とありしによりて、近く参りしに、「たゞ今蘆澤を召出して手づから誅すべし。それにさぶらふべし」と宣ひ出したり。答へ申すこともなくてありしに、やゝありて、「いらへ申す事もなきは、思ふ所やある」と仰せられしほどに、「さん候。かれが常々申し候ひし

いとけなし

不適
不敵
をこ

恐れ思ふ所



新井白石

は、「いとけなき時に父におくれし身の、莫大の主恩によりてかくまでは生長しぬ。此の恩に報いまゐらせんこと、世の常の人々の如くしては適ふべからず」と申す。天性不敵なるもの、しかも年なほ若くして、をこの振舞も多く候へば、いかなる奇怪をか仕出して候ひぬらん。但し、若く候時に彼が如くなるものにあらずしては、年たけ候ひし後に、物の用には立たぬもの多く候はんか。これらの事を存じめぐらし候につきて、御答の遅く候ひしは、恐れ思ふ所に候」と申す。又のたまひ出す事もなく、我も亦申す事もなくしてさぶらふほどに、やゝありて、面に蚊の集りぬるに、「逐

罷る

酎酒

折たく柴の記

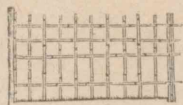
三卷、新井白石の
自敘傳、白石全集
第三卷所收。

ふべし。』とのたまひしほどに、顔を動かしければ、血に飽きて胡
頹子の如くになりし蚊の、六つ七つはら／＼と地に墜ちしを、
懐の紙を取出して、つゝみて袖にしてさぶらふ。又、やゝあり
て、罷り歸りて休み候へ。』とのたまひしかば、退出す。かの男は
常に酒を好みて酔ひ亂れゐる事どもありしかば、關といひし
人のそれに親しかりしを語らひて、二人して、まづ酒を斷たし
めて、常に諫めし事ども怠らず。かくて年月経し後に、つひに
父の職をも仰せ蒙りたりき。今は戸部もうせ給ひぬれど、は
じめ我が申ししことばの空しからざるやうに仕へまゐらせ
よと思ふなり。』と宣ひたりき。これは、かの人久しくして、また
酎酒の事ありしが故なり。

(折たく柴の記)

吉村冬彦

本名寺田寅彦、高
知縣の人、理學博
士、東京帝國大學
教授、昭和十年二
五卒、年五十八。
四つ目垣



一二 蜂

吉村 冬彦

私の宅の庭は、割に背の高い四つ目垣で、東西の二つの部分
に仕切られてゐる。東側の方のは、應接間と書齋とその上の
二階の座敷に面してゐる。反対の西側の方は、子供部屋と自
分の居間と隠居部屋とに三方を囲まれた、中庭になつてゐる。
この中庭の方は垣に接近して小さな花壇があるだけで、方三
間ばかりの空地は、子供の遊び場所にもなり、又夏の夜の涼み
場にもなつてゐる。

この四つ目垣には、野生の白薔薇を絡ませてあるが、夏が來
ると、これに一面に朝顔や豆類を這はせる。その上に自然に
生える烏瓜も絡んで、殆ど隙間のないくらゐに色々の葉が密



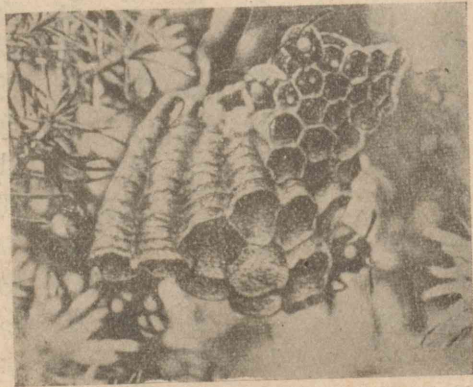
て、何處迄も空へ〜と競つてゐるやうに見える。

このさかんな勢で生長してゐる植物の葉の茂りの中に、枯

鳥 薔薇の葉などは隠れて見えな
瓜 いくらゐであるが、垣根の頂上
の からは幾本となく勢の好い新
花 芽を延ばして、これが眼に見え
るやうに日々生長する。これ
に又朝顔や豆の蔓が絡みつい

れかゝつたやうな薔薇の小枝から、煤けた色をした妙なものが一つぶら下つてゐる。それは蜂の巣である。

私が始めてこの蜂の巣を見つけ
たのは、五月の末頃、垣の白薔薇が散
つてしまつて、朝顔や豆がやつと二
葉の外の葉を出し始めた頃であつ
たやうに記憶してゐる。花の落ち
た小枝を剪つてゐるうちに、氣がつ
いてよく見ると、大きさはやつと拇
指の頭くらゐで、まだほんの造り始
めのものであつた。これにしつかりしがみついて、黄色い強
さうな蜂が一匹働いてゐた。



蜂の巣

長子

さんしち(三七章)



蜂を見つけると、私は中庭で遊んでゐる子供達を呼んで、見せてやつた。都會で育つた子供には、こんなものでも珍しかつた。蜂の毒の恐しいことを學んだ長子等は、何も知らない幼い子に、いろんな事をいつて、警めたり、おどしたりした。自分の子供の時に、蜂を怒らせて耳たぶを刺され、さんしちの葉をもんですりつけた事を思ひ出したりした。あの時分は、アンモニア水を塗るといふやうなことは、誰も知らなかつたのである。

とにかくこんな處に、蜂の巢があつてはあぶないから、落してしまはうと思つたが、蜂のゐない時の方が安全だと思つて、その日はそのままにして置いた。

それから四五日はまるで忘れてゐたが、ある朝、子供たちの

蜂窩
窩(穴)

學校へ行つた留守に庭へ下りた序に、ふと思ひ出して覗いて見ると、蜂は前日と同じやうに體を逆さまに巢の下側に取りついて仕事をしてゐた。二十位もあらうかと思ふ六角の蜂窩の一つの管に、繼足しをしてゐる最中であつた。六稜柱形の壁の端を顎でくはへて、ぐる／＼と廻つて行くと、壁は二ミリメートルくらゐ長く延びて行つた。その新に延びた部分だけが際立つて生々しく見え、上の方の煤けた色とは著しくちがつてゐるのであつた。

一廻り壁が繼足されたと思ふと、蜂は更にしつかりと身體の構を直して、そろ／＼と自分の頭を今造つた穴の中へ挿入れて行つた。いかにも用心深く徐々に身體を曲げて、頭の見えなくなる迄挿入れたと思ふと、間もなく引出した。穴の大

いさを確めて、始めて安心したと言つたやうに見えた。それからすぐ隣の管に取りかゝつた。

舉動
(目)
無慚に

私は今迄、蜂のこのやうな舉動を詳しく見た事がなかつたので、強い好奇心に驅られて見てゐるうちに、この小さな昆蟲の巧妙な仕事を、無慚に破壊しようといふ氣にはどうしてもなれなくなつてしまつた。

それから時は時々、庭へ下りる度に、わざ／＼覗いて見たが、蜂のゐない時は寧ろ稀であつた。見る度に六稜柱の壁は段々に延びて行くやうであつた。

或時は顎の間に、灰色の泡立つた物質を一杯溜めてゐるのが眼についた。そして壁を延ばす代りに、穴の中へ頭を挿しこんで、内部の仕事をやつてゐる事もあつた。併し、それがど

ういふ目的で、何をしてゐるのだから、自分にはわからなかつた。そのうちに私は何かの仕事に紛れて、しばらく蜂の事は忘れてゐた。多分半月程経つてからと思ふが、或日ふと思ひ出して覗いて見ると、蜂は見えなかつた。のみならず、巢の工事は前に見た時と比べて、ちつとも進んでゐないやうであつた。なんだか豫想が外れたといふだけでなしに、一種の——ごく軽い寂しさといつたやうな心持を感じた。

それから後は何時迄経つても、もう蜂の姿は再び見えなかつた。私はどうしたのだらうと、色々な事を想像して見た。往來で近所の子供にでも捕へられたか、それとも私の知らないやうな自然界の敵に殺されたのかも考へて見た。併し、又この蜂が、今現に何處か遠い處で、知らぬ家の庭の木立に迷

現に

幻影

斷念する
斷(斤・十四畫)

頻繁

つて、あてもなく飛んでゐるやうな氣もした。
 私は親しい友達などが死んだ後に、獨りて街の中を歩いて
 ゐると、ふとその友が現に同じ東京の何處かの町を歩いてゐ
 る姿をあり／＼想像して、言知れぬ寂しさを感ずる事がある
 が、この蜂の場合にも、これとよく似た幻を頭に描いた。そし
 て、強い眩しい日光の中に、きら／＼して飛んでゐる蜂の幻影
 が、妙に寂しいものに思はれて仕方がなかつた。
 或日何かの話の序に、Sにこの話をしたら、Sは私とはまる
 てちがつた解釋をした。蜂は、場所が悪いから、斷念して外へ
 移轉したのだらうといふのである。さういはれて見れば、或
 はさうかも知れない。實際兩側に廣い空地を控へたこの垣
 根では、嵐が吹通したり、雨に洗はれたり、人の接近する事が頻

本能
智慧

安直な
感傷的な

樂天家

厭世家

繁であつたりするので、蜂にとつては餘り都合のいゝ場所
 はない。併し、果して蜂がその本能或は智慧で判斷して、一旦
 選定した場所を作業の途中で中止して、他所へ移轉するとい
 ふやうな事が有るものか、無いものか、これは専門の學者にて
 も聞いて見なければ、わからない事である。
 若しSの判斷が本當であつたとしたら、つまり私は自分の
 想像の中で、強ひてあはれな蜂を殺してしまつて、その死を題
 目にした小さな詩によつて、安直な感傷的な情緒を味はつて
 ゐた事になるかも知れない。併し、何れにしても、私は私の幻
 想を無雜作に破つてしまつたSに對して、軽い不平を抱かな
 いではゐられなかつた。さうして、こんな些細な事柄にも、樂
 天家と厭世家との差別は現れるものかと思つたりした。

廢屋

みじめ

豫感

冬彦集
吉村冬彦著、雑誌
や新聞に寄稿した
小品感想録の類を
集めた隨筆集、大
正十二年(二五六)一
月刊行。

今日覗いて見ると、蜂の巢のすぐ上には、蜘蛛が網を張つて、その上には枯葉や塵埃が一杯にきたなくたまつてゐる。蜂の巢といひながら、やはり住む人がなくては荒果てた廢屋のやうな氣がする。この巢のすぐ向かふ側に眞紅なカンナの花が咲亂れてゐるのが、一層蜂の巢をみじめなものに見せるやうであつた。

私はともかくも、この巢を來年の夏迄この儘そつとして置かうかと思つてゐる。來年になつたら、この古い巢に若しや何事か起りはしないかといふやうな豫感がするのである。

(冬彦集)

今井邦子

本名は邦枝、長野縣の人、歌人、明治二十三年(三五〇)生。

苛立つ

白日の夢

断片的な

現象

とりとめのない

境地

人懐かしい

おとなふ

ずん／＼

二三 白日の涙

今井邦子

門の戸ががらりと開いて、人のはひつて來る氣配がした。暑い／＼日の午後三時頃である。机に倚つたまゝ、あまりの暑さに、書かうとするものを纏める氣力もなく、心ばかり苛立ちながら、白日の夢を見るやうな断片的な様々の現象が、頭の中に浮かんで消え浮かんで消えする、とりとめのない境地から引戻された。この暑い日盛に、誰が來たのだらう。私は一種の好奇心の雜つた人懐かしい氣持で、玄關から人のおとなふ聲を待つた。と、庭の中戸があいて、細長い竿の先がまづ頭を現し、それがずん／＼と無遠慮に庭にはひつて來る。「なんだ、坊やなのか。」

浅葱—浅黄

赭—赤
鹽辛蜻蛉



私の顔に思はず微笑が浮かんだ。今年六つになる男の子が白チヨツキに浅葱のズボン、帽子をめんどくさく頭に載せたといふ形で、長い蜻蛉竿を小脇に挟んで、燃立ちさうな赭い顔をしながらはひつて來るのである。右手には鹽辛蜻蛉を一つ掴まへてゐる。いつもの六疊の居間に机を据ゑて、それに倚つてゐる母親を、その子は一寸見ただけで、その前をずんずん通つて、自分のおもちや箱のおいてある部屋に行つて、がたがた何か引つくりかへしてゐる。

「坊やは何を捜すの？　そして、この暑いのに、日向を出歩いてゐると病氣になりますよ。」

「うん、蜻蛉だい。蜻蛉を入れておく箱がほしいな。母ちゃん、箱頂戴。」

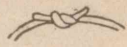
子供はひよつくり間の襖から顔を出した。まだ竿を抱へて蜻蛉を持つてゐる。

「いやな人。竿を家の中まで持込むなんてありますか。蜻蛉は縛つてあげるから、持つていらつしやい。」

子供はあわてて外に竿を投出して、蜻蛉を持つて母の側へ寄つて來た。

「しつかり掴まへておいで、さあ。」

私は白い糸を輪にして、蜻蛉の動かさどほしの足を狙つて糸をからげた。黒いむじや／＼とした毛のある細い六本の足、その一本を一つだけ結へられて今こまむすびにされようとすする蜻蛉は、よくはのみこめぬが、何か自分によくないことが足のところで起つてゐるのを感じ知つて、無意識に、しかし、



からげる
こまむすび

のみこむ
無意識に

息をこらす

烈しく反抗する。子供は息をこらして掴まへてゐる。
「さあ、結へました、手を離してごらん。ほら、ほら、飛ぶてせう、ね。」

子供も私も一緒に聲を出して笑つた。子供は満足さうに、また得意さうにそれを持つて、再び竿を抱へると飛んで出てしまつた。「日陰でお遊び」といふ母の言葉は、蜻蛉竿の前には、殆ど蛇のうなりよりも値のないもののやうに。

覺え。
鶺鴒竿
(黍)

家の中は再び前の暑い沈黙に返つた。が、私は机に倚つて、今度は明かるい心に生々とした思が湧上つて來るのを覺えた。子供にあの竿を買つてやつた日、家の働きながら勉強してゐる綾野さんが、坊ちゃんがああ長い鶺鴒竿を振廻して、この小路を出ていらつしやると、通る人がみんな笑ひながらよけ

十方感謝

文學士

實家

圍繞する

て行きますの。」といつたので、私達は聲を揚げて笑つた。その時のことが、再び私を優しい笑に誘ひこんで行つた。それから、だん／＼深く／＼、遂に十方感謝の世界へまで到達した。
私は嘗て、私の親戚のTさんといふ文學士から、悲しい昔語を聞いて涙を流したことがあつた。その人の生みのお母さんは、故あつて七つの年に實家へ歸つてしまつたのだつた。さうなるまでには、二年も三年も前から悲しい空氣がその家を圍繞してゐたといふ。Tさんはお正月に友達と風を揚げて遊んでゐながら、ふとお母さんが自分の留守に實家へ歸つてしまひはせぬかと思はれて來て、忽ち風揚げをよしてしまつて、自分の家へ足音を忍ばせて歸つて來る。そして、胸を轟かせながら、お母さんの居間の障子の穴から内をそつと覗い

寂しさうに

て見る。とお母さんが寂しさうに針仕事をしてゐる姿が目にはひる。そこでほつと安心して、また足音を忍ばせて外へ遊びに出かけた、といふことである。そして、縣道へ通ずる畑の道より外では遊ばなかつた。それは、お母さんが實家へ歸るなら、必ずその道を通つて、その縣道へ出るはずなので、そこに遊んでゐれば、お母さんを引止めることが出来ると思つたのであつたと話された。

そのことを思ひ合はせて見ると、今歸つて來た自分の子供は、なんと大膽に無遠慮に安心しきつて、母がそこにゐることさへも感じるか感じないかの空しい心で、私の前を通り過ぎたことか。そして、自分の遊戯に耽りきつてゐることか。それはほんたうに當然のことであるが、しかし、子供としての限

友 數へ(數へる)

故若山牧水の夫人
喜志子、長野縣の
人、歌人、明治二
十一年(三四)生。

ゆ

水垢離
つゝましやかな
戦 慄
戦(戈)

えにし

拔差し

りない恵なのである。げにそれは健康の人の健康、食べるのに困らぬ人の三度の食事、さういふ中に數へらるべき、求めぬ先にたゞ與へられる限りない自然の恵なのである。

子等ゆ見なば我は光か尊くもかしこきことぞいとし
子たちよ

友の歌が心に浮かぶ。水垢離を取る時のやうな、つゝましやかな戦慄が身に感じられた。

嗚呼、子と親とともに住んでゐる家！それは當然過ぎるほどの當然であつて、しかも、思へば自然の深い恵である。空しいにも似たその日常、そこにおのづから深いえにしの絶たれぬ豊かな恵がある。親によつて子は生き、子によつて親も生きる。その拔差しならぬ碁盤の線の、母といふ目の上にき

ちんと置かれた自分の位置。たゞそこにじつとしてゐるのが、既に事業よりも重い／＼役目をしてゐるのである。

このことに目覺めさせられたのは、なんといふ驚であつたらう。それは、血と肉と涙で得た一つの悟といつてもいい、ほどの世界であつた。それは、見たところ、決してはなやかなものでも、莊嚴なものでも、ゆゝしいものでもない。まことにあつけなく、見過せば見過しにされさうな、日ごろは有るか無いかさへも心に浮かばない日常の連鎖、水の低きに流れるやうな自然の歩みなのである。

母が母としてそこにゐること、そこを守つて守りぬくこと、その目的は安逸を貪るためでない。苦しい涙と自己犠牲と、時には身の震ふほどの悲しみにも耐へ、人によつては屈辱に

ゆゝしい

あつけない

連鎖

安逸を貪る

屈辱

交叉

合掌する
茜草

今井邦子著、隨筆
集、昭和八年三月
三一月刊行。

さへも耐へて、この空しきにも似た日常を續けて行くところに、人間の頭腦では判斷することの出来ないほど尊い仕事果されて行く。その果されて行くものの中に、自分の眞生命も含まれてゐるのである。そこに十方感謝がある。生かされあふ深い世界があるのである。どうかすると火のやうに燃上る心、自ら切つて出ようと焦る心、それは大方眞實の世界を却つて遠ざける。この微妙な交叉にまで身を置いて、始めて大自然の生かす道がどんなに微妙で、豊で、洋々として迫らず、しかも、徹底したものであるかに驚き服するのである。私はいつか合掌してゐる。靜かな涙が白日の光の中に點

點とこぼれ落ちてゐた。

(茜

草

松居松翁

名は眞支、宮城縣の人、劇作家、昭和八年(三五三)歿、年六十四。

時

延元元年(一九〇五)五月

處

攝津國(大阪府)櫻井驛



紋の水菊

人

楠木判官正成(四十三歳、庄五郎正行(十二歳、備前守正忠(一族)、惠美太郎正遠(同)、櫻井兵衛康光(四十餘歳)お久の方(正成の妻、水無瀬(康光の妻))

一四櫻井驛

松居松翁

攝津國櫻井驛の城主櫻井兵衛尉康光が庭前。中央、古松一株、下手は一面の庭樹を植込み、その後、母屋の見ゆる心。上手も枝振面白き庭樹、夏草の花壇などあり。處々に菊水の紋打ちし幕を張る。

正面は天王山を近く望み、寶積寺の三重の塔は、その山腹に塔頂を露す。遠く淀川船の船歌聞ゆ。正成は正忠、正遠及び櫻井康光夫妻と共に出来る。正成、正忠、正遠の三人は武裝す。

正成(正忠に) 作やお久がまるつたら、直ちに發足致しませう。一同に支度をさせていたゞきたい。

正忠 承知致しました。

(向かふより武士一人かけ来る。)

上手・下手

観客から見て舞臺の右手を上手、左手花道の方を下手といふ。

天王山

京都乙訓郡大山崎村にある小山。

寶積寺

天王山腹にある眞言宗の寺。

和子様

ぢや

荒くれ者

武士 奥方と和子様とがお出でになりました。

正成 おゝ、これへ案内してくれ。

武士 はつ。(向かふへ去る。)

(向かふよりお久の方と庄五郎とが武士に伴なはれて出づ。侍女二人つき添ふ。武士たちは鎧櫃を昇きて出づ。)

庄五郎(正成にすがりつきて) 父上、たうとう参りました。

正成(庄五郎の頭を撫でつと) うむ、よう來たな。(櫻井夫妻に) こ

の様な遠慮のない奴でござります。(庄五郎とお久の方に)

櫻井どの御夫婦ぢや。今度は大勢が厚い御世話に預つた。

(お久の方と庄五郎とは夫妻に挨拶する。)

お久の方 それは忝い事でござります。荒くれ者ばかりで、さぞ御迷惑でござりましたらう。

判官

檢非違使の尉、正成は元弘三年(尙三)檢非違使尉となつた。

申し聞ける



よしきり

康光何の手前どもこそ。都にては判官殿に何かと御世話に預つて居ります。

水無瀬 何にしても、こゝは庭先、どうぞあれへお通り下さりませ。

正成 いや、兩人には申し聞けたいことがござります。暫くここを拜借しませう。(武士に) 供のものは、御臺所でもお借り申して休息させるがよい。

水無 いえ、わたくしが御案内申し上げます。

お久 それでは却つて恐れ入ります。

水無 (其の者に) さあ、かうお出でなさりませ。(康光夫妻を先に、召使たち下手に入る。武士は一禮して向かふへ去る。行々よしきり子鳴く。)

お久 この度はわざわざ、お迎を戴きまして、有難う存じました。



櫻井驛址

せぬ。

初陣

鎧櫃



苦笑する

黯然と

正成 うむ、わしも急に逢ひたくなつたのでな。齡のせみかの、
今度は不思議に庄五郎の顔が見たくなつてな。

庄五 父上、私も初陣が出来るのでござりますか。

正成 (笑つて) それで鎧櫃をもつて來たのか。

庄五 はい。

正成 (なほ笑つて) お前はまだ早いよ。

庄五 併し、その中に戦の無い時が参りは致しませんか。

正成 (苦笑して) さうなれば結構ぢやが、お前一代、いや何代も戦
をせねばならぬ事になるであらう。(思はずお久の方と顔を

見合はず。お久の方黯然となる。)

庄五 それでも今度は父上と一緒に戦がしてみたいなあ。

正成 さういふ時節が來るかも知れぬ。併し、今度はもう一度

せえ。(せよ)

將監

左近衛將監楠木正家。

孫子

名は武、支那古代の兵法家、「孫子」十三篇を著す。

吳子

名は起、支那古代の兵法家、「吳子」一卷を著す。

六韜

支那古代の兵書。

三略

支那古代の兵書。

二郎

正成の子、後に正時。

小二郎

正成の子、後に正儀。

留守居せえ。

庄五でも、私はもう十三歳になつて居ります。

正成 併し、まだ戦のしやうは知らないからな。

庄五 いゝえ、存じて居ります。父上が戰場へ出られた御留守

の間でも、私は將監や母上から兵法の講釋を伺つて居りま

した。孫子、吳子も、六韜、三略も、昔讀んでしまひました。

正成 それは偉いなあ。父はこの春以來一緒に暮して居りな

がら、それほどは知らなかつた。お久、お前にさへまかせ

て置いたら、二郎も小二郎も、その他の伴たちも、庄五郎の弟

たるに恥ぢないものに仕立ててくれるであらう。さうし

て、わしの志を襲ぎ得るものが既に五人もあるとすれば、正

成は心を安く、いつでもこの世を去れるわけぢや。

五人

正成の第四子正秀、第五子正平を併せていふ。

赤阪

大阪府南河内郡赤阪村字水分。

千劍破

同郡東條村金剛山の半腹。

この春

延元元年(九九〇)二月正成京都に尊氏を破る。

死を必する

吳子に、「凡ソ兵戰ノ場ハ屍ヲ止ムルノ地ナリ。死ヲ必スルトキハ則チ生キ、生ヲ幸スルトキハ則チ死ス。」とある。

庄五(父の顔をじつと見て)では、父上はもう死を決しておいでになるのをござりますか。

正成(やゝ聲を勵まして)その尋ねかたは愚か過ぎるぞ。苟も

武士の家に生まれたものは、如何なる時、如何なる場合でも、

討死の覺悟なくして戰場に臨むべきではない。わしは赤

阪や千劍破に城を築いた時でも、この春の洛中の戦でも、き

つと討死の覺悟は定めて居た。それで居て、今日まで無事

に戰場を駆けめぐつて居た。そこが吳子の所謂、死を必ず

する時は則ち生きる。ぢや。死生を超越してこそ初めて眞の

武士といふ事が出来るのぢや。

お久、それに致しましても、なぜ今度に限り、わざわざ私どもを

お呼寄せになつたのをござりませう。心得のために伺つ

て置きたいと存じますが。

正成(笑つて)今もいふ通り、これは齡のせゐらしいぞ。實は今度の戦は、正成の出つくはした何十度の合戦中で、一番難儀なものらしい。そこでわしはひどく迷つたものぢや。ゆふべも眞夜中に目が冴えて眠られぬまゝ、吳子を讀んだ。そして、あらゆる疑が解けた。「兵を用ふるの害は、猶豫最も大なり。三軍の災は狐疑に生ず」ぢや。正成の兵法、今日までは、如何なる時も狐疑せず、敵をして疾風迅雷耳を掩ふの違なからしめるにあつたが、今度ばかりは狐疑し猶豫した。その爲に庄五郎の身も餘計に案ぜられて、お前たちを呼寄せる事になつたのぢや。今になつて見れば、杞人が天を憂ひたるやうな愚かさで、正成、心ひそかに恥ぢて居るのぢや。

目が冴える
兵を用ふ

吳子に「故ニ曰ク、
兵ヲ用フルノ害ハ
猶豫最モ大ナリ。
三軍ノ災ハ狐疑ニ
生ズ」とある。

猶豫する

狐疑する

疾風迅雷

杞人

列子に「杞國ニ人
ノ天崩墜シテ身ノ
寄スル所無キヲ憂
ヘ、寢食ヲ廢スル
者有リ」とある。

識見

天空海闊

併し、わしも今年は四十三ぢや。今までの戦場で無事であつただけ、これからは段々危険が大きくなつて行く譯ぢや。親子三人が手を取合つて長閑に語合ふ折も、この次にはもう無いかも知れぬ。さうして見れば、お前たちにわざわざ來て貰つた事も無益ではなかつたらしい。いや、庄五郎の學問識見のほどを知つただけでも、わしの心の曇は去つて、狐疑もなく、猶豫もなく、天空海闊の心をもつて兵戦の場に赴く事が出来る。これも言はばお前たちの賜ぢや。正成、禮をいふ。

お久、そのお喜を伺つて、私ども、どのやうに嬉しいか分かりません。今度は今度とは、どの合戦の時でも、お身の上を危みながらお見立て申して居りましたが、今度ばかりは安心

お見立て申す

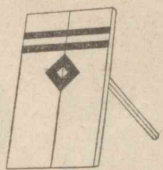
して御見送り申す事が出来ず。有難うござります。若し神佛の思召に適ひます事ならば、出来ませうだけは御身命をお厭ひ遊ばして……(思はず涙ぐむ)

正成よくいうてくれた。わしも益もなく生命を棄てようとは思はぬ。生きてさへ居れば、まだお上に御奉公の出来る身ぢや。併し、今度の戦は、九死に一生を求めのぢや。萬に一つの手違ひがあつても討死をせねばなるまい。お前の兄上、わしの弟たちも、枕を並べて討死をせねばなるまい。が、喜んでくれ。あの人たちは、喜んでわしと一緒に死ぬ覺悟をもつて居てくれるのぢや。この正成は生まれ落ちて、一つ自得した事とてもないが、たゞ士卒と共に楽しみも、苦しきもする事を知つて居る。さうして、それはこの三略

お上
後醍醐天皇。
九死に一生を求め
手違
兄上
備前守正忠。

自得す

玩味する
楯



治國平天下
先年

元弘三年(一九三)

屍懸則長
綸言

大和國(奈良縣)磯
城郡屍懸の刀鍛
冶、こゝはその人
の鍛へた刀の意
指南車



王佐

の巻から教へられたのぢや。庄五郎、お前も熟讀玩味して、出来る事なら、徒に弓槍を取つて護國の楯となるばかりでなく、治國平天下の輔佐の臣ともなるやうに心掛けるがよい。(腰の小刀をぬいて)これは先年、お上が隱岐の島より還御の砌、此の度のことは、正成そち一人の力であつたぞ。といふ忝い綸言と共に下し賜はつた屍懸則長ぢや。どうか楠木家の續く限り、子孫のものに語り續けて、世にも稀なる朝恩を永久に傳へてくれ。それからこの一卷は、今も言つた通り、この正成が一生の心の糧ともなり、數十箇度の合戦の指南車ともなつてくれた貴重な書ぢや。幸にお前の代になつて、この中の語が王佐の事業の資ともならば、正成あの世から禮を言ふぞ。お久にはこの上言ふべきこともないが、

猶い
耳をかす

子故の闇

人の親の心は闇に
あらねども子を思
ふみちにもどひぬ
るかな(藤原兼
輔)

陣鐘



陣太鼓



楠正成

松居松翁著、松翁
の戯曲「楠正成」
「女楠」「兒島高德」
及び松翁の息松居
桃多郎の戯曲「楠
木正行」を集む。昭
和三年(五六)九月
刊行。

たゞ心を用ふべきは足利殿ぢや。正成一代にあの人ほど
猶い人を見た事はない。如何なる手だてをもつて近づい
て来ようとも、決してその人の甘言に耳をかすな。お前ほ
ど堅固な心のもものに、いらぬ用心をさせるやうではあるが、
子故の闇に迷ひ易いが親の情ぢや。君子も道を以てすれ
ば欺かれぬものでもない。戒めても戒むべきは足利殿ぢ
やぞ。

お久 御教訓一々に肝に鑢りつけて、きつと御言葉の通りに致
します。御安心を願ひます。

正成 それを聞いてわれも心が落着いた。

(この時、上手に陣鐘陣太鼓の音聞ゆ。)

(楠 正成)

玉井幸助

新潟縣の人、國文
學者、東京高等師
範學校教授、明治
十五年(五四)生。

濁音

半濁音

拗音

一五 言葉の遣ひ方

玉井 幸助

一つ々きの話は幾つかの言葉が集つて成立ち、その言葉は
一つづつの音を組合はせて出来てゐるのであるから、はつき
りした話をするには、その基本となる一音々々の發音がはつ
きりしなければならぬ。その爲には五十音並びに濁音ガ
ギグゲゴの類、半濁音バビブベボ、それから拗音キャキユキヨ、
ジャジュジヨ、ピャピュピョの類など、即ち日本語の基本とな
る音の練習を十分にして、各種の音がはつきり出せるやうに
なつてゐなければならぬ。ところが、地方によつてはイとエ、
ユとヨ、ピとフ、シとス、ジとズなどの區別の出来ない處がある
が、これは正しい發音を聞分ける耳の力を養ふと同時に、正し

い發音の出来る訓練によつて矯正しなければならぬ。

次に、幾つかの音が集つて一つの言葉になると、そこに一つの纏つた發音といふものが出来るのであるから、言葉としての發音といふことに注意しなければならぬ。一つづつの發音はよく出来ても、これを續けて一つの言葉として言ふ時には、又、自ら別の練習が必要である。「ナママギ、ナマゴメ、ナマタマゴ」などは發音のしにくい言葉の一例であるが、そんなむづかしい言葉でなくても、不用意な人になると、折角よい發音を持つて居りながら、をかした言葉を遣ふことがある。例へば「私」といふ言葉を「あたくし」「わたつし」「わつし」など發音するのはまことに聞苦しい。「ばんざい」が「ばか」と聞えて怒られた笑ひ話などもある。發音の明瞭な言葉を遣ふといふことは、

よりがかる

是非心掛けなければならぬことである。

この發音の明瞭な言葉は「より」のかゝつた言葉といへると思ふが、言葉によりをかけるといふ心持が大切である。我が國の國語教育は、昔から文字の方面にばかり心を注いで、發音に對しては餘り心を用ひなかつたのであるが、これは大いに改良しなければならぬことで、これからは家庭でも學校でも、發音の訓練に十分心を注ぎたいものだと思ふ。正しい發音の出来ないのは、正しい音を聞分ける耳の力が發達してゐないことに根本の原因があるのであるから、發音練習の基礎として善い音を注意して耳に留めることが大切である。而して、よい音を正しく發音する爲には、喉や口や齒や唇や舌などを十分働かす練習をしなければならぬ。大きな聲や高い

聲を出さなくても、よりのかゝつた聲で話すと、丁度玉を轉がすやうに、言葉が一つ一つよく纏つて出て来て、はつきりよく聞きとれるものである。しかし、言葉にあまりよりがかゝり過ぎると、節瘤の出来た絲のやうに、節がついて耳ざはりに聞えるものである。又、言葉によりをかけようと思つて、餘りに顔の筋肉を動かし過ぎると、下品になる。言葉は明瞭といふことが第一要件であるが、又、上品といふことも大切であるから、この點の注意も肝要である。

話す人の心に關係する問題であるが、言葉の終がはつきり聞きとれないといふことがよくある。「さうだ」といふのか「さうでない」といふのか、肝腎な所へ行つて結末が曖昧になつてしまふのは甚だよくない。かういふ言葉遣は、とかく心のし

肝腎な

斷然

つかりしない人とか、ずるい人がごまかしをやる場合とかに用ひるものである。さうでなくて、さういふ言葉遣が癖になつてゐる人があれば、この癖は斷然改めなければいけない。

次に言葉の續け方、切り方、速さの加減、聲の上げ下げといふやうなことが、話を分かり易くする上にも、美しくする上にも大切である。意味の一續きに纏つてゐる所は、少々長くても息の續く程度ならば續けていふべきである。「この方は、さきほどお通りになつた神様方の弟さんです。」小學國語讀本卷四白兎と言ふ所を、この方はさきほどお通りになつた、神様方の弟さんです。」と言ふやうな切り方をすると、文の意味が全く變つて、二つの事を言つてゐるやうに聞きとられる。聲の上げ下げ即ち言葉の調子といふものは、意味の上に密接な關係があ

一本調子

る。どんなに意味のある言葉を並べても、工場の汽笛のやうな一本調子では、恐らく意味もとりにくいであらう。言葉の調子が言葉を成りたゞせる上の重要な要素であることは、次の例でもわかるであらう。「早くおいで。」と言ふ一つの言葉が、調子次第で「何をぐづ／＼してゐるんだ。」といふ意味にも聞え、「さあ／＼、おいしいものをあげますからね。」といふ心持にも聞える。調子一つで、同じ言葉が軽くもなり、重くもなり、親切にも不親切にも受取られるものである。調子は心の自然の現れであるから、心持の調和を保つことが何より大切である。

以上は大體聲の出し方に關係した事であるが、最後に言葉の選び方に就いて一言しよう。徒然草に「おそろしき猪のししも、臥猪よみの床とといへばやさしくなりぬ。」といつてゐるが、同じ

徒然草

吉田兼好著、隨筆、二卷、二百四十四段から成る。

臥猪の床云々

徒然草第十四段に見える。

事も言葉の選び方で大變感じのちがふものである。「食ふ」といふよりは「食べる」といつた方がやさしく聞え、場合によつては「召上る」「いたゞく」といふやうな言ひ方もある。なるべく丁寧な言葉を選ばなければならぬ。又物に就いて定まつた言葉遣がある。例へば物を數へるにも、机一脚、洋服一着、硯一面、馬一頭、鯛一尾、櫻一枝、菊一輪といふやうな區別があるから一通りは心得ておかなければならぬ。「くる／＼廻る風車」「ぐる／＼廻る水車」といふやうな譯で、その物によつて適當な言葉を選ぶ事が大切である。次に、新しい言葉の選擇であるが、新しい言葉には、新しい單語と新しい言廻しと二通りあつて、どちらも今盛に用ひられ、又どん／＼殖えてゆく傾向である。併し、この新しい言葉には、新しい事物が生じ、新しい考へ方を

斬新
奇抜
衝動

とつて代る

實用語言葉と文
講座
玉井幸助著、著者
が昭和十年(三五五)
一月から三月にか
けて、言葉、文章、
文字等に關して放
送した講座、昭和
十年五月刊行。

しなければならぬ必要に迫られて出来たものと、單に斬新奇
抜を喜ぶといふ一時の衝動から流行してゐるものとある。
この流行語といふ物は、いはば人間生活の表面を流れる泡の
やうな物であつて、何時の時代にも絶える物ではないが、又、永
續きするものでもない。始終新しい流行語にとつて代られ
て、いつの間にか消えて行くものである。それ故、これを使は
ないと時代に遅れるやうに考へるのは馬鹿らしい事であり、
又、これを根だやしにしなければ國語が傷つけられるやうに
考へるのも無用な心配である。従つて、あまり問題にするに
は及ばない。たゞ何處までも純正な上品なよい言葉を遣ふ
やうに考へることが必要である。

(「實用語言葉と文」に據る)

西條八十

東京市の人、詩人、
早稻田大學教授、
明治二十五年(三五
三)生。

登攀す
あくがれ
盈(皿)

一六 新 秋 頌

西 條 八 十

山より戻れる若者よ、――
新秋は微笑みて君を迎ふ。
雪白の峻峰を登攀して
君が瞳はいま崇きあくがれに盈つ。
海より戻れる若者よ、――
新秋は微笑みて君を迎ふ。

激瀾たる

高邁

人寰

少年詩集

西條八十著、少年
のために編んだ詩
集、昭和四年（三五）
四月刊行。

激瀾たる海波とあそびて

高邁の氣、いま君が胸に溢れたり。

海より、山より、戻れる若者よ、

人寰に入りて

山も海も、今日のはじめて君が心に生く。

雪峰のたかき理想を追へ。

蒼海のひろき愛を生活せよ。

（少年詩集）

一七 現代短歌抄

與謝野 寛

元鐵幹と號した、
京都市の人、歌人、
詩人、昭和十一年
（三五）歿、年六十
四。

はつはつ

北原白秋

一五頁参照
すがすがと
孟宗

與謝野 寛

1 萩の花はつはつ咲きて、いど蝉なく九月の二日母の日は來

ぬ

2 山のかぜ凍りて寒し草焼けば青きけぶりに薄みぞれ

ふる

北原 白秋

3 かさこそと蟹匍ひのぼる竹の縁すがと見つつ晝

寝さめゐる

④ 晝ながら幽に光るほたるひとつ孟宗の藪を出でて消

えたり

尾上柴舟

名は八郎、津山市の人、國文學者、歌人、東京女子高等師範學校教授、明治九年(三五三)生。

山科

京都市東山區。

前田夕暮

名は洋三、神奈川縣の人、歌人、明治十六年(三五三)生。栗の花



いひませし

半田良平

栃木縣の人、歌人、明治二十年(三五七)生。

尾上柴舟

5 春の谷あかるき雨の中にしてうぐひすなけり山のしづけさ

6 道のべの竹葉の霜に朝日さし小鳥よくな冬山科

前田夕暮

7 ほのじろく路におちたる栗の花わが子とふみてひそかにはゆく

8 ふるさとはつめたき土のにほひしてこほろぎのなく

うす月夜かも

9 足さむしからださむしといひませし母の御墓は雨にぬれつつ

男體の山

男體山、栃木縣上都賀郡にある、海拔二四八四米の山。

けともし

太田水穂

名は貞一、長野縣の人、歌人、明治九年(三五三)生。

花ぐもり

野火

高遠

長野縣上伊那郡。

葉ざくら

正岡子規

名は常規、松山市の人、歌人、俳人、明治三十五年(三六三)歿、年三十六。

半田良平

10 この藪の向かふに川のありと知りひそかに居れば水の音きこゆ

11 男體の山の清水を家に引き朝にけに飲む人のともしも

太田水穂

12 花ぐもりいささか風のある日なり晝野火もゆる高遠の山

13 葉ざくらの雨のしづくに青蛙まなこも濡れて鳴くにあるらし

正岡子規

14 四年ねてひとたびたてば草も木もみな眼の下に花咲

夕かたまく
伊藤左千夫

名は幸二郎、千葉
縣の人、歌人、大
正二年(五三)歿、
年五十。

鶺鴒



長塚節

茨城縣の人、歌人、
大正四年(五五)歿、
年三十七。

きにけり

15 若松の芽だちのみどり長き日を夕かたまけて熱いで
にけり

伊藤 左千夫

16 あは雪の消えて僅かに潤へる青き庭石に鶺鴒が来し
17 床のうへ水こえたれば夜もすから屋根の裏べにこほ
ろぎの鳴く

長塚 節

18 唐黍の花の梢にひとつづつ蜻蛉をとめて夕さりにけ
り

19 垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがじといねつたる
みたれども

島木赤彦

本名久保田俊彦、
長野縣の人、歌人、
大正十五年(五六)
歿、年五十一。

諏訪湖

長野縣諏訪盆地の
北部にある橢圓形
の湖、面積一五方
軒、冬季は結氷す。

戒名

善光寺

長野市にある天
台淨土兼宗の寺、
皇極天皇の元年(一
三三)創建。

とふ

齋藤茂吉

六五頁参照。

20 単衣きてこころほがらかなりにけり夏は必ずわれ
死なざらむ

島木 赤彦

21 まかがやく夕焼空の下にして凍らむとする湖のしづ
けさ (諏訪湖)

22 おのが子の戒名もちて雪ふかき信濃の山の寺に來に
けり (善光寺)

23 政彦の足音ききて鳴きしとふ山羊も賣られてこの家
になし (亡子を思ふ)

齋藤 茂吉

24 老い給ふ父のかたはらにめざめたり朝蝟のむらがれ
るこゑ (故郷)

岡麓

名は三郎、東京市の人、歌人、子規の門人、明治十年(一八七九)生。

佐佐木信綱

四五頁参照

藥師寺

南郡七大寺の一、奈良縣生駒郡都跡村にある、天武天皇御創建の勅願寺、法相宗大本山。

藤原

大和國(奈良縣)高市郡藤原にて、持統天皇・文武天皇の皇居があつた。

天の香久山

大和三山の一、藤原宮址の東方、奈良縣磯城郡香具山村にある小丘。

25 ほとぼそと土にしみいる蟲がねは月明き夜にたゆる

ことなし

岡麓

26 夕月は圓く大きく空にあり藤の花芽はほぐれかかれ

り

27 けだものの毛なみのごとく草原の草伏しなびき枯れ

にけるかも

佐佐木信綱

28 ゆく秋の大和の國の藥師寺の塔の上なるひとひらの

雲

29 藤原の大宮どころ菜の花のかすめる遠の天の香久山

一八 いろはがるた

島崎藤村

島崎藤村
名は春樹、長野縣の人、詩人、小説家、明治五年(一八七四)生。

い 犬も道を知る。

ろ 櫓は深い水、棹は浅い水。

は 鼻から提灯。

に 雞のお早うも三度。

ほ 星まで高く飛べ。

へ 臍も身のうち。

と 虎の皮自慢。

ち 小さい時からあるものは、大きくなつてもある。

り 林檎に目鼻。

臍(肉)

燃え。



ぬ 沼に住む鯰、沼に遊ぶ鯰。
 る 瑠璃や駒鳥を聞けば父母がこひしい。
 を 丘のやうに古い。
 わ わからずやにつける薬はないか。
 か 賢い鳥は黒く化粧する。
 よ 好いお客は後から。
 た 竹のことは竹に習へ。
 れ 零點か、百點か。
 そ 空飛ぶ鳥も土を忘れず。
 つ つんぽに内證話。
 ね 猫には手毬。
 な 何も知らない馬鹿、何もかも知つてゐる馬鹿。
 ら 蠟燭は靜かに燃え。

澄む

む 胸をひらけ。
 う 瓜は四つにも、輪にも切られる。
 ゐ 猪の尻もちつき。
 の のんきに根氣。
 お 玩具は野にも畠にも。
 く 草も餅になる。
 や 藪から棒。
 ま 誠實は残る。
 け 決心一つ。
 ふ 不思議な御縁。
 こ 獨樂の澄む時、心棒の廻る時。
 え 枝葉より根元。
 て 手習も三年。

鸚鵡



つ
わする
市井にありて
島崎藤村著、感想
集、昭和五年（三
九）十月刊行。

あ 鸚鵡の口に戸はたてられず。
さ 里芋の山盛り。
き 菊の風情、朝顔の心。
ゆ 雪がふれば犬でもうれしい。
め めづらしからう、面白からう。
み 耳を貸して、手を借りられ。
し 仕合はせの明後日。
ゑ 笑顔は光る。
ひ 日和に足駄ばき。
も 持ちつ持たれつ。
せ 蟬はぬけがらをわする。
す 西瓜丸裸。

（市井にありて）

文盲

書きすます
詮もなし
ほかと
くうたり

上洛す

一九 笑話

一 文盲の犬

「人くらひ犬のある處へは行かれぬ。」と語るに、「虎といふ字を手の内に書いて見すればくらはぬ。」と教ふ。後、犬を見、虎といふ字を書きすまし、手をひろげて見せけるが、何の詮もなく、ほかとくうたり。悲しく思ひ、或僧に語りければ、「その犬は大方文盲であらう。」

二 目じるし

田舎より主従二人始めて上洛し、宿にて休息の後見物に出

下人
家作
領承す

る。下人に向かひ、「都はいづれも同様なる家作なり。よくよく目じるしをせよ。」と教ふ。「心得たり。」と領承せしが、晩にのぞみ、宿を知らず。主腹を立て叱る。返事に、「いや、門の柱に唾にて書付を確に仕りしが、消えて見え候はず。その上になほ念を入れ、屋根の上に鶯の二つありしを、目じるしにしたりしが、それもゐないで見えぬ。」と。

三 朱 槍

腑抜け
ふるまふ
生得
いる
二間まなか

腑の抜けたる人に海老をふるまひけるが、赤きを見て、「これは生まれつきか、また朱にて塗りたるものか。」と問ふ。「生得は色が青けれど、釜にていりて赤うなる。」といふを、合點しるけり。後、或侍の馬に乗りたる先へ、二間まなか柄の朱槍二十本ばかり持ちたる中間どもの走るを見、手を拍つて、「さても世は廣し。奇特なることや。」と感ず。「何をそなたは感ずるや。」と問ひたれば、「その事よ。今の槍の柄の色は、火をたいて、むいたものぢやが、あれほど長い鍋がようあつたことや。」と。

中間

奇特なる

よう。

四 米の飯

客來るに亭主出て、「飯はあれど、麥飯ぢやほどに、いやであらう。」といふ。「我は生得、麥飯が好きぢや。麥飯ならば三里も行きたくはう。」といふ。さらばとて、ふるまひけり。また或時、件の人來る。「そちは麥飯好きぢやほどに、米の飯はあれども出さぬ。」といふ。「いや、米の飯ならば五里行かう。」とてまたくうた。

亭主
くは。う。
件
醒睡笑
八卷、三冊、安樂菴
策傳が幼年時代か
ら耳にした笑話を
元和九年(三三三)七
十歳の折書き記し
おいたもの。
策傳は寛永十九年
(一七四二)歿。

(醒 睡 笑)

高濱虚子

名は清、松山市の
人、子規の弟子、
俳人、小説家、明
治七年(三五)生、
ランプ



上野

東京市下谷區上野
公園

根岸

上野公園の北の
麓、正岡子規の住
宅はこゝにあつ
た。

彼

正岡子規、一一五
頁参照

二〇 柿 二 一 〇

高濱 虚子

ランプの光は静かに更けていつた。時々上野の森に反響して轟き過ぎる汽車の音が聞えるばかりで、根岸の夜は沈んだやうに淋しかった。

日によつて不定ではあるけれども、この頃は一體に彼の熱は夜に入つて下ることが多かつた。夜中頃から再び上るのではあるが、その平熱になつた時の心持はさすがにすかしくかつた。病主人の頭はさういふ時に一層透明になるのであつた。彼は自分を神かと疑ふばかりの明快な判断を、數限りない句の上に下すことが出来た。句の良否は、色の黑白のやうに明白に、一見して立ちどころに判断することが出来た。

自分で自分を怪しむぐらゐに、それは容易で且迅速であつた。彼の淋しい家庭には、六十を過ぎた老母と、今年二十七になつたまだ嫁がない妹とがある許りであつた。老いた母も婚



正岡子規

期を失した妹も、たゞ主人の病を看とる爲に生きてゐた。二人は次の間の暗いランプの下で、病室の物音に耳を敏てながら、各黙つて針を運んでゐた。

やがて妹は膝の絲屑を拂つて立上つた。それは、病主人の枕許に、盆に載せた柿を運ぶためであつた。「もうこれぎりかい。」と、彼はながし目にその盆の柿を見ながら聞いた。「昨日あ

健啖
食指が動く

んなにお食べたから、もうこれぎりよ。」と妹は答へた。盆の上にはたゞ二つほか載つてゐなかつた。

彼は總べてのものに健啖である中に、殊に果物を好んで食うた。中にも柿は飽くことを知らなかつた。彼は忽ち食指

大佛をうつめて
しろし花の雲 升
(升は子規の名
のぼるとよむ)



蹟筆 規子

慰藉

が動いたのだが、たゞ二つの柿を今食つてしまふことは心細かつた。それは是非とも今日の大事業——投書函の一掃——が完了した時の慰藉の料に取つておかねばならなかつた。彼は心の中で呟いた、「選が濟んでしまつたら、この柿を御褒美

に遣るよ。今一息だ。搦まずに片付けてしまへ。」と。かくて、漸く底の見えて來た句稿の選に、更に一心不亂に取掛つた。

燈火は主人の心を知るかのやうに、瞬きもせず牙渡つた。

傍の火鉢に炭のつがれたことも、時計が十二時を打つたことも、老いた母の寢床に入つたことも、彼は知らぬではなかつたが、それらはあまり深くその注意を惹かなかつた。妹が床に入つたのはそれから一時間も後であつたが、それはその物音が兄の仕事の妨にならぬやうに、いつ臥つたとも分からぬぐらゐひそやかであつた。

静かな沈んだ夜の呼吸が聞えた。彼の目は燈火に光り輝いて、この夜の色の中に、ひとり帝王のやうな威を示してゐた。最後に手に當つた草稿を見終つた後、彼は念のため投書函を

朱筆

搔探して見たが、もう其處には一枚も残つてゐなかつた。彼は朱筆を投棄てたまゝ、兩手で頭を抱へて、暫く身動きもしなかつた。

久しく心に掛つてゐた仕事を片付けてしまつた慄へるやうな満足の情と、病軀に不相應な努力のあとに來る疲勞の恐とで、彼の心は搔亂されてゐた。が、やがてその頭を抱へてゐた手をほどいて、蒲團のそとに現した彼の顔はいよゝゝ興奮して、蒼白い皮膚の中にも、頬のあたりの赤みは色を増してゐた。

もう時計は二時を過ぎてゐたが、彼は少しも眠いとは思はなかつた。燈火を中心としたこの病床六尺の天地は、今は何物にも煩はされない、極めて自由な、希望に充ちた世界のやう

媚びる

伏見の桃山

現京都市伏見區。



愚庵

俗名天田五郎、僧、
明治三十七年（五十六）
巴寂、年五十一。

に思はれた。今や彼の體温は再び上つて、そのためにいつもの酒に酔つたやうな興奮した心持になつてゐるのであるといふことには、氣が附かうともしなかつた。

彼は煩はしげに盆の上の柿を見やつた。柿の赤い色は媚びるやうに輝いてゐた。抑へてゐた彼の食欲は猛然として振るひ起つた。彼は餓ゑた虎が残忍な眼を光らして兎を掴むやうに、忽ちその柿一つを取りあげて、皮を剥き始めた。

この柿は、伏見の桃山に庵を結んでゐる愚庵といふ禪僧から贈つて來た釣鐘といふ珍しい名の柿であつた。さういへば、形がどこか釣鐘に似てゐた。この禪僧といふのは、維新の戦亂に母と妹が生死不明になつてしまつたその行方を、何十年かの間探したが、遂に見當らなかつたことが動機となつて、

天龍寺

京都市左京區嵯峨町にある、臨濟宗巨利、京都五山の一。

滴水和尚

禪僧、天龍寺の再興に盡くした、明治三十二年(一八九五)寂、年七十八。

鉗槌

萬葉調

中年から天龍寺の滴水和尚の鉗槌の下に僧となつた人であつた。主人は既に數年前から交遊があつたのであるが、この禪僧も主人と同じく肺を病んでゐる上に、萬葉調の歌をよくし、また書に巧みであつた。俳句は作らなかつたが、それらの關係から互に推重して、何かにつけて贈答を怠らなかつたのであつた。今度の柿は、桃山の草庵に禪僧を尋ねた人が、庭前の柿を託されて、遙々と携へて歸つて病床に齎したものであつた。

それは昨日のことであつた。その人がまだ枕頭にある間に、彼はもう辛抱が出来なくなつて、その柿を三つ續けさまに食つた。その人が歸つた後も、夜寝るまでに十ばかり平げた。今夜枕頭に運ばれたものは、その残りのたゞ二つであつた。

武者ぶりつく

彼はその一つを取つて、その皮を剥くより早く忽ちそれに武者ぶりついたのであつたが、もう大方食盡くして、帯の所に達した時、少し顔を擡めた。それは稍澁かつたのであつた。けれども、彼はそれに頓著せず、その帯の際まで少しも残さずに食つてしまつた。次の柿も同じく帯の所が少し澁かつた。

三千の俳句を閲し柿二つ

當用日記に、彼は毎日の出来事を句にして、十句づつ書くことを日課にしてゐた。明日になつて、今日の部を認める時に、忘れぬやうにこの句を加へねばならぬと思つた。疲労が一時に出て来るやうに思はれて、頭がぐらくした。彼は始めて熱の高いことを覺えたのであつた。

柿 二 っ

柿二つ
高濱虚子著、寫生文の立場に立つ小説、大正四年(一五七)五月刊行。

正岡子規
一一五頁参照

味はひ。(味はよ)
からぶ
あさはかなり

行脚

端なく

碧・虚

河東碧梧桐と高濱
虚子

諏訪山

神戸市の北部にあ
る。

齋す

二 果物の味

正岡子規

果物ほど味はひの高く清きものはあらじ。小兒はこれを好み、仙人もこれを食ふとかや。青梅は酸くして口を絞れども、鹽少しばかりつけんには、味はひ言ひがたし。杏はからびて賤しく、李は水多くしてあさはかなり。苺は西洋苺を良しとす。されど、行脚の足くたびれて、草鞋の緒ゆるみたる頃、巖の角に腰うち据ゑて、汗をぬぐふ手の下に端なく見附けて取食ひたる、味はひは問はず、時にとりていとうれし。神戸に病みし時、物一つ咽喉を通らず、乳さへ飲みえぬに、わが爲にとて碧虚二子の朝な〜諏訪山の露を分けて、一籠の赤き玉を齋しくれたる、いかばかりうれしかりしぞ。

なべて

したゝむ

俗

ザボン



え...ぬ
たうぶ

王母後園の風味

西王母が漢の武帝
に仙桃をすゝめた
故事によつて書い
た。

詔ふ

枇杷はうまけれど、種子大きく肉少きは飽かぬ心地す。桑の實はなべての人に知られねども、果物の中、これを外にして甘き物はなし。晝餉さへしたゝめずに貪りたる木曾の旅の、思ひ出でられて懐かし。夏蜜柑・ザボンの類、俗を離れて涼し。さして良しとにはあらねど、少し病みて飯さへえたらうべぬ時など、またなき物とぞ覺ゆる。梨は涼しく潔し。南窓に風を入れて、柱に倚り襟を披き、片手にて團扇を持ちながら、一片を口にしたる、氷にも優りてすがすがしうこそ。林檎は北海の産を最上とす。さはれば形消えて、涼やかなる風味ばかり口の中に残りたる、仙人の薬にも似たらんか。桃には種類多し。良きもあり、悪しきもあり、王母後園の風味は知らねど、すべて桃は世に詔はぬところに一段高き趣あり。



甜瓜



ひなぶ
野氣
多血性
無花果

われから
子規隨筆續篇
小谷保太郎篇、正
岡子規の隨筆集、
明治三十五年(癸
三十二年)刊行

甜瓜、西瓜、ひなびたれど、誠あり、すて難し。葡萄は、甘からず、澁からず、人に媚びず、さりとて世に負かず、君子の風あり。栗は賤し。甘藷と比べられたるも口惜し。柿は野氣多く、冷やかなる腸を持ちながら、味はひはいと濃やかなり。多血性の人、世を厭ひて里に隠れながら、なほ物に觸れて熱血を迸らすにも譬へんか。柚子は氣高けれども食ふべからず。石榴無花果のわれから裂けたるは食劣りぞする。われこの夏頃より、わけて果物を食ひ、物書かんとすれば、必ずこれを食ふ。書ささして倦めば、又これを食ふ。食へば即ち心涼しく氣勇む。氣勇めば則ち想涌き筆飛ぶ。われ力を果物に借ること多し。

朱硯に葡萄のからの散亂す

柿くうて洪水の詩を草しけり

(子規隨筆續篇)

宮城道雄

兵庫縣の人、生田
流箏曲家、新日本
音樂創始者、明治
二十七年(壬午)生。

二 三 音 の 世界

宮 城 道 雄

私が光の世界から斷たれたのは、私の七歳の頃から、九つ頃まではほんの少しではあるが見えてゐた。箏の稽古を始めた時は、手でさぐりながらも、絃を見て弾いてゐたやうに、私は記憶してゐる。

光を失つた私の前には、複雑極まりない音の世界が展開されて來た。色に觸れぬ淋しさは、十分償はれるやうになつて來た。さうして、これが私の住む世界だと思つてゐるので、光の世界も懐かしいと思ふこともあつたけれども、今はもう慣れてしまつて、何とも思はなくなつた。

私は目で見る力を失つたかはりに、耳できくことが、殊更鋭

償ふ

敏になつたのであらう。私は音によつて、物の色や形などを思ひ浮かべることが出来る。音についてはいろ／＼と深く考へることが多いのである。それで、音によつて私の感じたことを話して見たいと思ふのである。

音と色とは離れることの出来ない關係を持つてゐるのだと私は思ふ。音には白い音、黒い音、赤い音、黄色い音といふやうに、いろ／＼な音がある。白い音をきくと、單純さや聖人や僧侶などを思ひ浮かべるし、黒い色の音をきくと、暗黒や悪人などを想像するのである。このやうに、一つ／＼の音には、やはり性格や色彩があるのだと、私は思つてゐる。

私は作曲する時には、メロデイに重きをおいて表現したい

メロデイ

「旋律」「節廻し」、英語。

ハーモニー

「和聲」と譯する、メロデイの調和である、英語。

と考へてゐるが、ハーモニーはこの音の色といふことを考へて、効果をあげるやうに心がけてゐるのである。湖を表さうと思ふ時には、私はメロデイとそのハーモニーによつて、あの透通るやうな、碧い色を思ひ浮かべるやうな音をつくり出すことを考へてゐるのである。また秋の氣分を出すためには、淋しいメロデイと共に、枯葉の散る秋の色を決して忘れない。

八卦見

八卦見が手相・人相・骨相など見て、人の性格や吉凶や運命を判断するが、聲もその通りである。世界中で同じ人相がないのと同様に、聲もまた、人々によつて皆違つてゐる。強弱、清濁、高低、ひからびた聲、潤ひのある聲、甘つたるい聲、粗野な聲など

千差萬別である。その聲の調子によつて、その人の性質なり顔の形がわかるのである。殊に性格はよく聲に現れる。さうして、その時の表情なども大かたは聲で想像出来るのである。肥つた人と瘠せた人の聲は非常に違ふし、頭のよしあしも聲をきけば、大抵わかるやうである。また、同じ人でも、心に惱がある場合は、どんなに快活な聲を作つてゐても、すぐわかるものである。よく、お顔の色が悪いがどうか、なさいましたか。といふが、私なら、「お聲の色が悪いがどうか、なさいましたか」ときゝたいところである。

以前に私が大連に旅行したことがある。その時、船の中で退屈のあまり、船長や船客たちと一緒に、お茶を飲みながら話をした時、私が音をきいて、何かよくいひ當てるのを興がつて、

一つ、聲で運勢を占つてくれ、といはれて、打興じたことがある。またよくあることであるが、大勢人の集る會などで、誰それが來たとか、まだ見えない、とか騒いでゐる場合に、遠くにその人の聲をきゝつけて、私は、來てゐるなと思ふのである。そのうちに、他の人たちも漸く人込みの中に、その人を見附けて、來てゐることを知るのである。

よく子供などが稽古に來た時、行儀を悪くしてゐるのはすぐわかる。私が「ちゃんと坐つて」といふと、びつくりして坐り直す。それで思ひ出したが、ある夏の暑い日のことであつた。尺八の合奏に來た書生が、私にわからぬやうに、そうつと著物を脱いで吹かうとした、その時、私が「裸で涼しいでせうな。」といつたら、その書生は驚いて著物を著たことがあつた。

書生

人に會つて話をする時も、相手の人の近くに寄つてゐれば、その人の態度やもの腰も手にとるやうにわかる。その人が話の最中に、ふと外の事を考へたり、目を外らせたりすれば、直ぐ聲の調子に變化が來るので、私はそれがわかるのである。

いつであつたか、呂昇の「紙治」をきいたことがあるが、女房のおさんが箆笥の中から著物を出しながらものをいふくんだり、呂昇の顔は明らかに聴衆の方へ向いてゐるに違ひないのであるが、その聲色や語り口が、如何にも、女房のおさんが後向きになつて、箆笥をあけたてしながら、ものをいふやうに聞えたので、私はひどく感心したことがある。

私の住んでゐるところは、省線までよほど離れてゐるけれども、雨が降る前とか、天氣の悪い時などには、戸外の物がはつ

呂昇

豊竹呂昇のこと、
本名永田仲、名古屋の人、義太夫の
女流名手、昭和五
年(三五〇)歿、年五
十七。

紙治

紙屋治兵衛を略し
た稱へ方、近松門
左衛門作淨瑠璃
一天の網島の主人
公、おさんはその
女房の名。

省線電車

きり聞えて來る。遠くを走つてゐる省線電車の音が聞える時は、雨だなと思ふのである。そればかりではなく、三味線の絃や、箏の絃でもわかる。絃がしめつて來るし、それに音も牙えなくなる。今日は天氣がよいが、二三日のうちには雨になるといふことも、大抵豫想が出来る。

朝の氣持、晝の氣持、夜の氣持は、目に見えなくとも、色々の物音や周囲の空氣で、私にはそれと感ぜられるのである。

自然の音は、自分が音楽をやつてゐるだけに、最も親しいものである。同じ風でも、松風の音、木枯の音、又、撫でるやうな柳の風、さら／＼と音のする笹の葉など、一つ／＼に趣のあるものである。

私は雨の音が好きである。取りわけ春の雨はよいもので、

軒から落ちる雨だれの音などきいてみると、身も心も引入れられてしまふやうな感じがする。

せらぎ

海の遠く鳴る音、瀧の音、小川の流、谷川のせらぎ、水車の靜かに軋る音などは何れも趣きのあるものである。

私はまた小鳥が好きで、都の中に住んでみると、自然の森や林で自由に囀る鳥の音をきかれぬことは淋しい。私は作曲に感興が湧いて、自然の音にひたりたいと思ふ時などは、居ても立つてもゐられない程、懐かしい思ひがする。

自然の音は全く、どれもこれも音楽でないものはない。月並な詩や音楽に現すよりも、自然の音に耳をかたむける方が、どれだけ勝れた感興を覚えるか知れない。私たちがどんなに努力しても、あの一つに勝れたものは出來ないであらう。

私は夜寝られぬ性で、作曲も多くは夜中、人が静まつてからする。徹夜を續けることも珍しいことではないので、私には夜の物音は特に親しみが多いわけである。殊に私は雨の夜が好きで、雨の夜は作曲もおちついてよく出来るやうに思ふ。夜になると、あたりが靜かになるにつれて、晝間聞えなかつた物がはつきりと聞えて来る。小さな蟲の翅ずりする微かな音から、戸棚の奥で鼠のごとくと物を引く音、臺所の水桶に水道の水が滴る音、また、遠くに聞える汽車の汽笛などは、一層夜の靜けさを思はせられるのである。「どうせ見えないのだから夜も晝も同じことで、怖くはないであらう。」ときく人もあるけれど、私にもやはり怖いのである。身に迫つて来る夜の氣は、皮膚に觸れた感じでわかる。そ

空鳴り

鈴木鼓村

本名映雄、宮城縣
の人、音樂家、京極
流の箏曲を以て國
風音樂會を創設。

疎める

んな時、よく樂器が空鳴りをするのをきくことがあるが、實に無氣味なものである。いつであつたか、鈴木鼓村氏が箏の空音をきいて、人の死を直感したといふ話をきいたことがある。夜更けて、作曲をしてゐる際に、色々の樂器の調子を整へて、身のまはりに立掛けて、その中に一人で坐つてゐると、丁度、自分が今思ひ浮かべてゐる音調に、びつたりと合つた音のする時がある。それは、羽蟲などが絃にさはつたり、空氣の乾濕などの具合から、絃に緩みが出來たりしたために鳴るのであると思ふが、とにかく思はず身を疎めることがある。また、この澤山の樂器が一時に鳴出したら、どうであらうと、考へたりして、ぞうとすることもある。そんな時には、思はず部屋から逃出したいやうにさへなるのである。

よく盲人が一人で歩くのを不思議に思ふ人があるが、傍て見る程不自由なものでなく、慣れると案外平氣なものである。廣い道や狭い道、曲り角、四辻、また、小さな建物や大きな建物など、空氣の壓力や風の吹き具合によつてわかるものである。角から何軒目は洋食屋で、次が蓄音機屋、その次が風呂屋といつたやうに、自分の歩く道はちやんとわかる。私はよく手を引かれながら、道を教へて行くことがある。自動車の運轉手にも、よく教へてやるのである。一遍覺えておいたら、却つて目明きの人よりも確かである。殊に家の近くになると、何となく自分の家に近づいたことを感じる。近所の子供の聲や犬の聲がしてゐると、親しみのあるせみか一層よくわかるのである。

騒音

宮城道雄著、隨筆集、著者の口述を筆記したもの、昭和十一年（三五九）一月刊行。

その他、旅行をしても、汽車の進行するにつれて、變る景色も私は想像することが出来る、富士が見えるといはれると、自分の目の前に富士山の姿を思ひ浮かべるのである。私が一番樂しみなのは、汽車が停車する度に、入りかはり立ちかはりするお客のお國言葉をきくことである。
文明の音が段々ふえて來ることも樂しいものである。近頃はラヂオが盛になつて來てゐるので、我々盲人にとつては、眞に都合のよいものである。晴れた日に、飛行機がプロペラの音勇ましく、空を飛んでゐるのは何ともいへぬのんびりした感じがするものである。
かうしたやうに、いち／＼耳をかたむけて、味はつて行けば、音についての感興はなか／＼盡きるものではない。（騒音）

徳富蘆花

名は健次郎、熊本縣の人、蘇峰猪一郎の弟、小説家、昭和二年（五六七）歿、年六十。

二三 吾が家の富

徳富蘆花

家は十坪に過ぎず。庭はたゞ三坪。誰かいふ「狭くして且陋なり」と。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狭きも碧空を仰ぐべく、歩して永遠を思ふに足る。

神の月日はこゝにも照れば、四季も來り見舞ひ、風雨雪霰かはるがはる到りて興淺からず。蝶兒來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來り遊び、秋蛩亦吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて樹に滿つ。風ある日には、青々と霞める空より白き花ちらちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。



蝶兒
秋蛩
觀ず
李

紅雨霏々
白雪紛々
瓣一瓣一辯
山梔



山吹



五月闇
宜なり

亭々と
手水
廣うして

隣家に花樹多し。風に随ひて飛花吾が庭に落つ。紅雨霏霏白雪紛々、見るがうちに満庭花の衣を著く。仔細に見れば桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。



徳富 蘆花

庭隅に一株の山梔あり。五月闇鬱陶しき頃、香ばしき白花を開く。主も妻も無口なれば、この花の吾が家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の碧梧あり。碧幹亭々として、些の邪なく、吾が如く直かれと教ふるに似たり。梧葉と手水鉢の側なる金剛纂は、葉廣うして、吾が家の雨聲を多からしむ。

滾々と

つくつくほふし



閑寂
蛻蟻

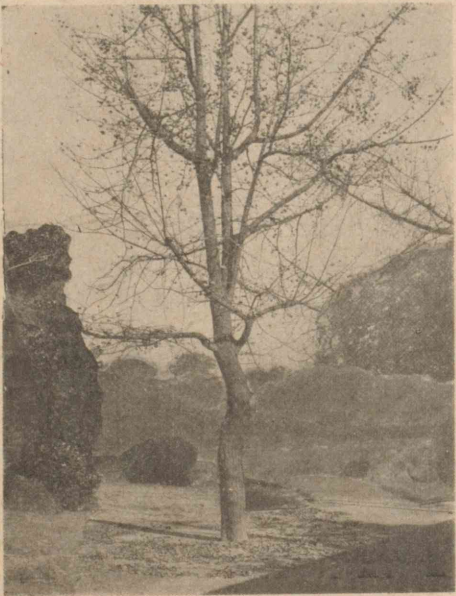
本名梁田邦美、明石藩(兵庫縣)の儒臣、詩人、寶曆七年(二四一七)歿、年八十六。

獨り憐々
蛻蟻の詩
荆扉
海内ノ文章
蛻蟻の詩

李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ぶ男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つくつくほふしの

聲に、世はいつか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅にもえ出で、たゞ一株、前の家主の植残したる黄菊も咲出づ。名苑の花美しといふとも、



銀杏

秋の哀閑寂の趣は、却つて吾が庭の一枝にあるべし。蛻蟻の翁なりせば、獨り憐々、細菊ノ荆扉ニ近キヲとや吟ぜん。恥づ

布衣

かぐや姫
赫耶姫、竹取物語
の主人公。

寸金

自然と人生
徳富蘆花著、小説、
感想等八十九篇を
あつめたもの、明
治三十三年（一九〇〇）
八月刊行。

らくは、海内ノ文章布衣ニ落ツ。」と唱すべき身にあらざるを。
屋後に一株の銀杏あり。秋深くして満樹金よりも黄なり。
木枯の風起れば、かぐや姫の扇にせまほしきその葉、翩々とし
て飜り落つ。半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開け
ば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も庇も手水鉢も、處として
落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人はいふな
る錦を吾は庭に敷きぬ。
木の葉落盡くしてはさすがに淋しげなるも、日影月影いよ
いよ多くなりて、空を見、星を見るに障少きは嬉し。
（自然と人生）

羽仁もと子

東京市の人、教育
者、自由學園長、
「婦人之友」主筆、
明治六年（一八七三）
生。
鎌倉
神奈川県鎌倉郡。

二四 自然の教訓

羽仁もと子

私どもの鎌倉の假の住居は、海と小山に近く、田と畑の中に、
町を離れて立つて居ります。朝に夕に、清らかな天然の教訓
に接することの出来ますのは、不便な生活に伴なふ大きな幸
福の一つであります。

粟の穂は重く垂れ、稻もはや色づくばかりになりました。
麥の切株が鋤きかへされて小さい種子が播かれ、鏡のやうな
水の中に早苗が植ゑられてから、まだ幾日も経たないやうな
氣がします。昨日も今日も同じであるとはかり眺め暮して
みた間に、いつこのやうに楽しい秋が見舞ひ來つたのでせう。
思へば夢のやうであります。わが心の願が天の意に叶ひ、わ

まはり
漑る
転ぐ
半生



收 穫

が日々の業がまたよい事であつたなら、一様な天然の恩恵は、また私たちの知らない中に、自分たちのする業の上に注がれてゐるであらませう。今日も明日も同じやうに見えるわが心、わが身のまはりの状態も、收穫時を天に任せ、一心に漑ぎ転る間に、時には困難もあり、時には小さい失望があるにしても、遂に種の喜ばしい實を結ぶやうになることは、私どもの半生に於ても度々経験したことであります。

穫一獲

蟲がよい

ります。知らない間に米が實のり、粟が熟する様を見て、正直にわが業にいそしむものの幸福を思ひ、今更のやうに希望と感謝に充たされるのであります。胡瓜を植ゑて西瓜を穫るつもりだといふ人があつたら、何人もその愚を笑ひ、その邪な考を卑しむてありませう。転らないで転つたやうな體裁を装ひ、転つたものと同様の結果を得ようとするものがあれば、何人もその蟲のよいのに呆れるてありませう。しかも、世の中には善い心、偽のない眞實な努力によらず、いろ／＼の他の方法、即ち、巧みに世を渡ることなどによつて眞の幸福を得ようとする人が澤山あります。それは胡瓜を植ゑて西瓜を穫らうとするのです。天然は欺け

誤魔化し

ないけれども、人の世は誤魔化しのきくところだと思ふ人があれば、それは間違ひであります。人の目は或時の間くりますことが出来ます。さうして邪な心も、浅はかな智慧も、富の力も、時にまことの榮えのやうに輝くことがあります。併し、人生も亦明らかに神の田畑であつて、罪惡によつて眞によい實を結び、善良な努力によつて悪い實を結んだ例はないばかりでなく、善良な努力も罪惡も、すべてそれ／＼の力の大小によつて、如何に適切に報いられてゐるかは、獨り歴史が私どもに語るばかりでなく、思を潛めて、狭いわれらの見聞の中をたどつて見ても、明らかに了解されることとあります。

「夏作は一日遅れると半月の損」と、この邊の農家では申します。あたりよりも四五日早く植ゑつけた一つの甘藷畑は、果

人一倍

抜目がない

して他に先だつて收穫を始めました。新に市に出る野菜は、一日でも早いだけ、よい價をもつてゐるのであります。さうして、次に播くべき菜や大根も、ゆつくりと天氣都合を見はからひ、最も適當な日に植ゑつけることが出来ました。さうして、收穫の遅れた他の畑が、あわてて次の種子をまき、折悪しくも照りつゞきにあひ、風にあつて、辛うじて生ひ出た弱い芽とは、殆ど同じものとは思はれないばかり威勢のよい葉を茂らせて居ります。

賢く勤勉な農夫は、同じ一枚の畑でも人一倍に利用して、多くのよいものを作りだすことが出来ます。私ども各の才能も、これを養ひこれを用ひることが熱心で抜目がなければないだけ、他の同じほどの才能を與へられた人よりも、價値のあ

る生涯を送ることが出来ます。私どもの心の畑は十分に開拓され、さうして、無駄なしに利用されてゐるのでせうか。次から次とよい智慧を生み出すべき心の畑が、とかくに打棄てられ勝ちになつてゐることは、實に大きな不幸不利益であります。甘藷の畑は、私どもに心の畑を出来るだけ利用せよと教へてくれました。

低い垣根に朝顔の花が咲き、小さい畑に茄子が瑠璃色の實を結びました。夕な〜に萎んだ花を摘み、伸びすぎる蔓のさき、茂り過ぎた葉を去つて、つとめて無用のものに幹を勞せないやうにしました。今もなほ、朝顔は朝な〜目さむるばかり數多く咲きほこり、茄子も水々しく實のつてゐます。

(羽仁もと子著作集)

夕な〜

羽仁もと子著作集
十七卷、羽仁もと子の著作を集む、昭和三年(天心七月)昭和八年(天心三月)五月刊行。



(第一回)

Y

耕

芳賀矢一

福井市の人、國文學者、文學博士、東京帝國大學教授、昭和二年（五六七）薨、年六十一。

冶—治

精進潔齋

神明

感通する

奥義

何事にまれ

刻苦す

二五 道

芳賀 矢一

昔刀鍛冶が刀を鍛錬する時は、一心不亂であつた。精進潔齋、一切の邪念を棄てて、神明に感通するまで心を籠め、思を凝らした。さういふ至誠と集中があつて、始めて武士の魂とするにふさはしい名刀は鍛へ出されたのである。しかし、これはひとり刀劔鍛錬の上のみではなく、萬事此の境に到らなくては、到底其の奥義は極められない。我々の祖先は、何事にまれ、一事を修めようとするとするに當つては、實に此の覺悟と決心をもつて刻苦し勉勵したのである。

これは、古來すべての藝術に道といふ語が用ひられてゐることによつても明らかである。道とは、神道・儒道・佛道等の語

極樂往生

住吉明神

住吉神社、大阪市
住吉區住吉町に鎮
座、和歌三神の
一、官幣大社。

参籠する

敷島の道

葦原の道

末技

に於ける如く、人の依るべき所の意で、道徳的な意味が主となつてゐて、單なる術とは違ふ。 劍術・弓術・馬術などといへば、單に其の技術をいふのであるが、其の極意・奥義をいふ場合には、必ず劍道といひ、弓馬の道といふ。 昔は、和歌を學ぶ人は、歌道を學べば直に極樂往生が出來るとまで信じた。 それ故、名歌を得られるやうにと住吉明神に参籠したことなどは決して珍しくない。 歌道は又日本固有の道であるといふ所から、敷島の道・葦原の道なども名づけられたのである。 其の他書法を書道といひ、茶の湯を茶道といひ、更に香のやうな末技までも香道といつた。 音楽はもとより、活花でも蹴鞠でも投扇でも、すべて道として尊んでゐる。 藝術は指の先や手の先で唯其の技術を練習するだけでも、勿論或程度までは上達出來

るが、それは畢竟生命のない技術に過ぎない。 眞の上手になり、奥義を究めるには、心がこれと融合しなければならぬ。 一心不亂、其の藝術に専らにならなければならぬ。 碁を打つ人でも、碁の外には何も考へないやうにならなければ上手にはなれぬといふ。 碁などはもとより一種の遊戯に過ぎないから、普通の人が其の爲に一切を放擲するのは考へものだが、碁や將棋の様な遊戯に於てさへ、専門家になるにはそれだけの覺悟がなくてはならないといふのである。 言換へて見れば、何の業もすべて精神を打込まねばならぬといふのである。 しかも、其の精神たるや、道徳に合はして非難する所のない、立派な精神でなくてはならぬ。

凡そ、人の趣味・性格は必ず其の動作・技能の端にまであらは

れるもので、人の筆蹟を見れば其の人物が分るとは一般にい
はれてゐる所である。まして詩歌等の作品の上にあらはれ
るのは勿論で、歩き方や靴の減り方からさへ人物を見分ける
ことが出来るといふ人がある。かくの如く、如何なる技藝藝
術にも、其の人の性格があらはれるものであるから、其の技藝
藝術の極致に到らうとするには、上に敍べたやうに、一切の邪
念を棄てて、精進潔齋の心でこれに當らなければならぬのは
蓋し當然の事であらう。茲に至つて智と徳とは合一する。
といつても、智から徳が出るのではなくて、徳がなければ眞の
智には達せられぬといふのである。此の意味を以て見れば、
我等の祖先が小さい藝能までも道と稱し、又、其の道の師を同
時に人間の師として尊んだことが、甚だ意味深いことに思は

れる。

今日の普通教育に於ては、種々の教科目を立て、其の中、修身
科以外の科目は、單なる知識技能の修得を目的とするかのや
うに考へられてゐるが、これは甚だ誤つた考であつて、教育の
本義は、やはりすべてを修行として一貫することてなければ
ならぬ。いはゆる道が一切の根柢をなすのでなければなら
ぬ。人間としての根柢を鍛へ、性格を練り磨くことと、知識技
能を開発させることとが二つであつてはならぬ。知識技能
を磨くことによつて人間を磨き、人間を向上させることによ
つて知識技能を進めてゆくのである。又、高等教育に於て專
門の學業を修めるにも、其の學業をあくまで自分の道と考へ、
一身を捧げて之に當らなければ、到底其の蘊奥には達し得ら

修行
一貫する

蘊奥

方便

れないであらう。學者も、藝術家も、皆それらの學問・藝術を尊び、これに仕へる心でなければならぬ。然るに、動もすればこれを單なる方便と考へ、其の結果自らも頭の人、手先の人となるのに甘んじてゐる人々があるが、これは學問・藝術の第一義を忘れたもので、學問の人たり、藝術の人たる資格のないものである。

安價

元來、修行といふことは並大抵の事ではない。それで、古人は修行には何より勉強が大切であると信じてゐた。今は勉強といふ語が非常に安價に使はれて、一時間位讀書しても、今日は一時間勉強したなどといふ。一時間の讀書が果して勉強といへるであらうか。古人の勉強はさういふやさしいものではなかつた。彼等は、學問・藝術を道として神聖視したの

神聖視する

鼓舞する

て、其の道を得る爲には、眞に骨身を削るやうな刻苦をしたのである。例へば、かの寒稽古を見よ。人が衣を重ね褥を厚くして寒さを凌ぐ、嚴冬の朝稽古著一枚で、火の氣も無い道場に、平素よりも激しい稽古をする。寒ければ火鉢を入れ、ストーヴを焚くといふ今日の勉強振りとは非常に違つたものである。しかし、かく寒中朝早く起きて、劍術を學び、柔術を學んだ所で、術其のものが短時日の間にさう際立つて上達するといふわけではない。寧ろ寒苦を忍んで勉めるといふことに重要な意義が存したので、修行の容易ならぬことを悟つて、之に對する覺悟態度を確にする所以であつた。換言すれば、寒暑に負けず困苦に打克つて、目ざす道一つに集中し精進しようとする熱心と氣力を鼓舞する所に目的があつたのである。

不惜身命

日本人

芳賀矢一著、國民性の見地から教育勅語の主旨を謹解したもの、明治四十五年(一九七三)七月刊行。

さうして、此の熱心と氣力こそ、あらゆる學問・藝術を道として成就させる原動力であつたのである。
我々は、我々の祖先が、斯の如く、一藝を學ぶにも常に道として其の修行に志し、不惜身命の覺悟を以て志業の大成を期した事を新に考へてみなければならぬ。

(日本人)

女子新國語讀本 新制版 卷三 終

國語假名遣表

わ・は

語の上でわ・はは互に紛れない。語の中と下とで紛れる。左の外ははと書く。

- あわ(泡・沫)
- みなわ(水沫)
- あわつ(周章)
- あわただし(倉皇)
- いひわけ(言分)
- のわけ(野分)
- おひわけ(追分)
- うらわ(浦回)
- しまわ(島回)
- かわく(乾・渴)
- くつわ(轡)
- はにわ(埴・輪)
- くわぬ(慈姑)
- ことわざ(諺)
- しわざ(爲業)

ことわる(斷・理)

こわいろ(聲色)

こわだか(聲高)

こわね(聲音)

さわぐ(騒)

さわやか(爽)

しわ(皺)

しわし(吝)

すわる(坐)

たわし(束藁子)

たわむ(撓)

たわむ(撓)

たわやか(嬋妍)

たわやめ(手弱女)

たわら(依)

はらわた(腸)

ひわ(翺)

ゆわう(硫黃)

よわし(弱)

かよわし(弱)

いわし(鱈)

あ・い・ひ

語の上ではあ・いが互に紛れ、語の中と下とではあ・い・ひが互に紛れる。左の語の外はひと書く。

あ(井)

あげた(井桁)

あど(井戸)

あぜき(井堰)

あな(田舎)

あ(居)

あざり(膝行)

かも(鴨居)

しき(雲居)

くも(雲居)

くら(位)

しば(芝居)

とり(鳥居)

まど(團樂)

もと(基)

あ(猪・亥)

あ(猪)

あ(猪)

いぬ(乾)

あ(胃)

あ(牽る)

ひき(牽る)

あ(藍)

くれ(紅)

あ(紫陽花)

くわ(慈姑)

ま(参る)

あ(老)

く(悔)

む(報)

え・ゑ・へ

語の上ではえ・ゑが互に紛れ、語の中・下ではえ・ゑ・へが互に紛れる。左の語の外はへと書く

糸(繪)
 糸がく(畫かく)
 糸のぐ(繪具)
 糸かき(畫工)
 とも糸(輜繪・巴)
 糸(餌)
 糸ぼし(烏帽子)
 糸む(笑)
 糸がほ(笑顏)
 糸くぼ(壓)
 糸つぼ(笑壺)
 糸じ(衛士)
 糸ふ(酔ふ)
 糸ひとれ(醉客)
 こ糸(聲)
 つ糸(杖)
 つく糸(机)
 ゆ糸(故)
 す糸(据)
 す糸ぶろ(据風呂)
 いしす糸(礎)
 す糸(末)

す糸ひろ(末廣)
 こす糸(木末・梢)
 う糸(飢・餓)
 う糸(植)
 う糸(植)
 う糸こみ(前栽)
 ち糸(智慧)
 え(兄)
 えと(兄弟)
 きのえ(甲)
 ひのえ(丙)
 つちのえ(戊)
 かのえ(庚)
 みづのえ(壬)
 え(枝)
 えだ(枝)
 しづえ(下枝)
 え(江)
 いろえ(入江)
 ふえ(笛)
 さざえ(螺螺)
 はえ(映)

ゆふばえ(夕映)
 もえ(萌)
 もえぎ(萌黃)
 みえ(外見)
 はえ(生)
 ひこばえ(藥)
 いえ(癒)
 あまえ(甘)
 おびえ(脅)
 おぼえ(覺)
 きえ(消)
 きこえ(聞)
 こえ(越)
 こえ(肥)
 こごえ(凍)
 さえ(冴)
 たえ(絶)
 ひえ(冷)
 ふえ(殖)
 ほえ(吠・吼)
 もえ(燃)
 もだえ(悶)

を・お・ほ・ふ
 語の上ではを・おが互に紛れ、語の下中ではほ・をが紛れる。おは語の中下に用ひることはない。左の語の外は語の上ではお、中と下とではほと書く。

を(男・雄・夫・牝)
 をつと(夫)
 をとこ(男)
 めをと(夫婦)
 たけを(猛夫)
 ますらを(丈夫)
 をひ(甥・姪)
 ををし(雄雄)
 を(小)
 をとめ(少女)
 をぢ(伯父・叔父)
 をば(伯母・叔母)
 を(女)
 をみなへし(女郎花)

を(尾)
 をばな(尾花)
 を緒
 はなを(鼻緒)
 を麻・苧
 をけ(桶)
 をさ(箆)
 をか(岡・丘・陸)
 をかぼ(陸稻)
 をがむ(拜)
 をかし(可笑)
 をかす(犯)
 をぎ(荻)
 をこ(痴・愚)
 をこがまし(痴)
 をさ(長)
 をさなし(幼)
 をさむ(治修・收藏・納)
 をささ(大抵)
 をしどり(鶯鶯)
 をしふ(致)
 をしむ(惜)

をす(食・治)
 をち(遠)
 をちこち(遠近)
 をととひ(一昨日)
 をととし(一昨年)
 をとり(囚・媒鳥)
 をどる(踊・跳・躍)
 をの(斧)
 をのく(裸)
 をはる(終・卒・了)
 をり(檻)
 をり(節)
 をり(居)
 をる(折)
 をしき(折敷)
 しをる(萎)
 しまり(架)
 つづらをり(九十九折)
 をろち(大蛇)
 あを(青)
 あまがひ(螺鈿・青貝)
 あをし・あをむ(青)

いさをいさまし(功績)
 うを(魚)
 かつを(鯉)
 ひを(水魚)
 しらうを(白魚)
 かをる(香薰)
 さを(竿・棹)
 しをん(紫菀)
 しをらし(可憐)
 しをる(萎)
 たまやか(嬋妍)
 たまやめ(手弱女)
 とを(十)
 ばせを(芭蕉)
 まをす(申)
 みさを(操)
 みを(滯・水脈)
 みをつくし(滯標)
 やをら(徐)

ふと書いてをと發音する場合。

あふひ(葵)
 あふぐ(仰)
 あふぐ(煽)
 あふぎ(扇)
 あふる(煽)
 あふみ(近江)
 とほたふみ(遠江)
 きのふ(昨日)
 けふ(今日)
 さふらふ(候)
 たふる(仆・倒)
 たふとし(貴)
 はふる(投)
 ふくろふ(巢)

じ・ち
 じ・ちは語の上・中・下どこにあつてもじに紛れる。左の語の外はじと書く。

ち(父)
 をち(伯父・叔父・小父)
 ちち(爺・祖父)

ち(略)

やまぢ(山路)

よみち(黄泉)

すぢ(筋)

うち(氏)

ひぢ(臂)

あぢ(味)

あぢはひ(味)

あぢ(鱒)

いちらし

かぢ(棍)

かぢ(銀治)

ひぢ(泥)

ふぢ(藤)

ふぢばかま(藤袴)

こうぢ(麴)

くぢら(鯨)

よぢる(攀)

けぢめ(區別)

ことぢ(琴柱)

ねぢ(螺旋)

ねぢく(拗)

あぢさゐ(紫陽花)

ちぢむ(縮)

なんぢ(汝)

もみぢ(紅葉)

わらぢ(草鞋)

なめくぢ(蛞蝓)

みそぢ(三十)

よそぢ(四十)

いそぢ(五十)

むそぢ(六十)

ず・づ

ず・づは語の上・中・下どこにあつてもともに紛れる。左の語の外は、づと書く。

ずす(誦)

ずす・じゆず(數珠)

ずるし・ずるける(狡猾・怠慢)

あんず(杏子)

ゆず(柚子)

いしずゑ(礎)

こずゑ(梢・木末)

かず(數)

かならず(必)

きず(傷・疵・瑕)

くず(葛・國柘)

すず(鈴・錫)

すずき(鱸)

すずし・すずむ(涼)

すずしろ(蘿蔔)

すずな(菘)

すずめ(雀)

すずり(硯)

すずろ(漫)

たたずむ(佇)

なずらふ(準)

ねずみ(鼠)

はず(筈・弭)

やはず(矢筈)

ゆはず(弭)

はずみ(機)

ます(雜・交・混)

みみず(蚯蚓)

もず(百舌鳥・鴟)

さ行變格活用の濁れるもの。

禁ず信ず等

常用漢字

字

(大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正)(千八百五十八字)

【一】一丁七丈三上下不世丙並

【二】中

【三】丸主

【四】之久乏乘

【五】乙九乞也乳亂

【六】了事

【七】二五五井

【八】亡交亦京亭

【九】人仁仇今介仕他付

代令以仰仲伴任伊伏伐

休伯伴伸伺似位低住佐

何余佳佛作使來例侍供

依侮侯侵便係促俊俗保

狹信修俱俳俵俸倉個倍

倒候借倫餅假偉偏停健

側偶傍傑備催傳債傷傾
僅働像僚僞僧價儀億儉
償優

【一〇】元兄充兆兇先光克
兌免兒

【一一】入内全兩

【一二】八公六共兵其具典
兼

【一三】冊再

【一四】兀

【一五】冬冷涼准凌凍

【一六】凡

【一七】凶出

【一八】刀双分切刊刑列初
判別利到制刷券刺刻則
削前剛副剩割創劇劍劑

【一九】力功加劣助努効勅
勇勉勳勸務勝勞募勢勤
勳勸勸

【二〇】包

【二一】化北

【二二】區

【二三】十千升午半卑卒卓
協南博

【二四】占

【二五】印危却卵卷卽

【二六】厄厘厚原厥

【二七】去參

【二八】及友反叔取受

【二九】口古句叫召可史右
司各合吉同名后吏吐向
君吟否舍呈吸吹告咸周

味呼命和咽哀品員哲唐
唯唱商問啓善喉喜喪喫
單嗣嘉器噴嚴囁

【三〇】囚四回因困固國圍
園圓圖團

【三一】土在地坂均坊坑坪
垂型埋城域執培基堀堂
堅堤堪報場塔塗塵境墓
塀增墨墮壁壇壓壤

【三二】士壯壹壽

【三三】夏

【三四】夕外多夜夢

【三五】大天太夫央失奇奉
奏契奔奢輿奪獎奮

【三六】女奴好如妃妊妥妙
妨妹妻姉始姑姓委姦姪

婚姻委威娘娛媚婚婦
婿媒嫁嫡嫌嫌
【子】子字存孝季孤孫學
【宅】宅守安宏完宗官定
宜客宜室宮害宴家容宿
寄密富寒察寢實審寫寬
寶
【寸】寸寺封射將專尉尊
尋對導
【小】小少尙
【尤】就
【尸】尺尼尾尿局居屈屈
屋展層履屬
【山】山岡岩岳岸峙峯島
峽崇崎嶇
【川】川州巡巢
【工】工左巧巨差
【己】己

【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣
【干】干平年幸幹
【幻】幻幼幾
【床】床序底店府度座庫
庭庶康廉廓廢廣廳
【延】延廷建廻
【弄】弄弊
【弋】弋式
【弓】弓弔引弟弱張強彈
【影】影形影影影
【役】役彼往征待律後徐
徑徒得從御復徵徵德徹
【心】心必忌忍志忘忙忠
快念怒思怠急性怨怪怯
恐恥恨恩恭息悔悟悖患
悲惟悼情感惜惠惡情惱
想愁愉意愚愛感慈態慕

慘慢慎憤慨慮慰慶慾憂
憐憚憲憶憾憤懇應懲懷
懸戀
【戈】成戎戰戲戴
【戶】戶戾房所扇
【手】手才打扱扶批承技
抑投抗折抱抵押披抽拂
拍拒拓拔拘拙招拜括拳
拾持指振捕捧描拾掃授
掌排掛採探控推揚接提
換握揮揭揮援損搖搜擴
携摩撫揮擊操擔據擬擴
攝
【支】支
【支】支
【改】改改攻放政故致教
敏救敗敢散敬敵敵數數整
【文】文
【斗】斗料斜

【斤】斤斤斬新斷斯
【方】方施旋旅族旗
【无】既
【目】目且旨早旬旭昇昌
明易昔星春昭昨是映時
晚晝普景晴晶智暇暖暗
暑暮暴曆曇曜
【目】目曲更書曹會替最會
【月】月有朋服朕朗望朝
期
【木】木未末本札朱机朽
杉材村束柿杯東松板枕
林枚果枝枯架柄某染柔
查柩柱柳栗校株根格栽
桃棠桐桑梅條梨棗棗棋
棒棟森檜植楠業極榮構
概樂樓標樞模樣樹橋機
橫檄檢櫻欄權

【欠】次欲款欺歌歡歐歡
【止】止正此步武歲歷歸
【歹】死殊殉殖殘
【支】段殺殿毀
【母】母每毒
【比】比
【毛】毛
【氏】氏民
【氣】氣
【水】水水永汙求汗汚江
池決汽沈沒冲沙汰河沸
油浴沼沿況泉泊法波泣
泥注泰泳洋洗津洪活派
流浦浪浮浴海浸消涉液
淑淚淡淨淫深混清淺添
滅淵渡溫測滲渴湖湧湯
源準溢溶溺滅滋滑滯滴
滿漁漂漆漏演漕漠漢漫

漸潔潛湖澤激濁濃濟
濱瀧灣
【火】火灰災炊炎炭烈無
然煉煮煙照煩熱熱燃燈
燒營爆爐
【爪】爪爭爲爵
【父】父
【爻】兩
【片】片版牌
【牙】牙
【牛】牛牧物牲特犧
【犬】犬犯狀狂狩狹猛貓
猶獄獨獲獵獻
【玄】玄率
【玉】玉王玩珍珠班現球
理琴環璽
【瓦】瓦瓶
【甘】甘甚

【生】生產甥
【用】用
【田】田由甲申男町界長
烟畜畝略番畫異雷當疊
【疋】疋疎疑
【疒】疒疲疾病症痘痢
療癖
【登】登發
【白】白百的皆皇
【皮】皮
【皿】皿盆益盛盜盟盡監
盤
【目】目盲直相省眉看眞
眠眼着睡督
【矢】矢知短
【石】石砂砲破研硬硯碁
碎碑確磁磨礎
【示】示社祈祕祖祝神票

祭禁禍福禦禮
【禾】秀私秋科秒租秧移
稅程稚種稱稻稿穀積穗
穩
【穴】穴究空突窺窻窠窠
【立】立章童端競
【竹】竹竿笑笛符第筆等
筋筒答策算管箱節範築
篤簡簿籍
【米】米粉粒粘粗粹精糖
糞
【糸】糸紀約紅紋納純紙
級紛素紡索紫累細紳紹
紺終組結絕絡給統絲絹
經綠維網綉綵綵綵綵
線緜綠編綉綉練練練綉
縮縱總績繁織繕繪繭線
縵縵

【丑】缺	【舛】舞	【言】言訂計討訓託記詁	【車】車軌軍軒軟軸較載
【網】罪置署罰罵罷羅	【舟】舟航般舵船船艦	訪設許訴診詐詔詔評詞詠	輕輦輪輯輸輿轉
【羊】羊美羣義	【良】良	試詩詰話詳誇誌認誓誕	【辛】辛辨辭辯
【羽】羽翁翌習翼	【色】色	誘語誠誤說課調談請論	【辰】辰農
【老】老考者	【艸】芝花芽芳苑苗若苦	諭諸諾謀謁諮講謝諡謹	【是】込迎近返迫迭述迷
【而】耐	英茂茶草荒荷莊菊菌菓	謬證識譜警譚議護譽讀	追退送逃逆透逐途通速
【耒】耜	榮華萬落葉著葬蒙蒸蕃	變讓	造連週進逸遂遇運週
【耳】耳聖聞聯聲職聽	蔓薄藏藝藤藥	【谷】谷	道達達遙遞遠遭適遭遲
【聿】肅肇	【虜】虜虐處虛號	【豆】豆豐	遷選遺避還邊邊
【肉】肉肖肝股肥肩育肺	【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶	【豕】豚象豪豫	【邑】邦邪邱郊郎郡部郵
胃背胎胞胸能脅脈脊	【血】血衆	【貝】貝貞負財貧貨販貫	都鄉
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜	【行】行術街衢衛	責貯貳貴買貨費賀賀貨	【酉】酌配酒酢醕醅酸醉
膝臆臆膺臍	【衣】衣表袞袋袖被裁裂	賄資賦貧賜賞賢賣賤賦	醜醫
【臣】臣臥臨	裏裕補裝裸製複褒襲	質賴購贈贊	【采】釋
【自】自臭	【西】西要覆	【赤】赤	【里】里重野量
【至】至致臺	【見】見規視親覺覽觀	【走】走赴起超越趣	【金】金釜針鈞鈍鈴鉛鉢
【白】與興舉舊	【角】角解觸	【足】足距跡路踴躍	銀銃銅銘銳鋒鋼錯錄錢
【舌】舌舍		【身】身	鍋鎖鎮鏡鑄鐘鐵鑑鐵

【長】長	【面】面	【馬】馬馳駁馱駐騎騰騷	【麥】麥
【門】門閉開閑閑闕闕	【革】革靴	驅驗驚驛	【麻】麻
【阜】防附降限陞院陣除	【音】音響	【骨】骨髓體	【黃】黃
陪陳陰陵陶陷陸陽陸除	【頁】頁項順頓預頤領頭	【高】高	【黑】黑默點黨
階隔隙際障隣隨險隱	頻題額類頤頤類頤類	【毛】髮	【鼓】鼓
【隹】隹雀雄雅集雇雌雙	【風】風	【門】闕	【鼻】鼻
雜離離	【飛】飛翻	【鬼】鬼魂魔	【齋】齋
【雨】雨雪雲零雷電需震	【食】食飢飲飯飾養餓餘	【魚】魚鮮鯉鯛	【齒】齒齡
霜霧露靈	餅館餐	【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄	【龍】龍
【青】青靜	【首】首	【鹵】鹽	【龜】龜
【非】非	【香】香	【鹿】鹿躍	

注意

- (一) 本表にない漢字は假名で書くこと
- (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること
- (三) 代名詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと
- (四) 外來語は假名で書くこと。

略字表 (臨時國語調査會發表)

左の字體を本位として用ひること。
(括弧内の小字は字典體)

勸(勸) 權(權) 灌(灌) 歡(歡) 觀(觀)
 沢(澤) 扒(擇) 訳(譯) 馭(驛) 釈(釋)
 変(變) 恋(戀) 蛮(蠻) 灣(灣)
 莖(莖) 徑(徑) 經(經) 輕(輕)
 併(併) 塤(塤) 瓶(瓶) 餅(餅) 研(研)
 齊(齊) 齋(齋) 濟(濟) 劑(劑)
 殘(殘) 淺(淺) 賤(賤) 錢(錢)
 勞(勞) 營(營) 榮(榮) 學(學) 覺(覺)

举(舉) 眷(眷) 斷(斷) 繼(繼)
 齒(齒) 齡(齡) 濕(濕) 頭(頭) 顯(顯)
 窓(窓) 窓(窓) 總(總) 属(屬) 囑(囑) 囑(囑)
 為(爲) 偽(偽) 帶(帶) 帶(帶) 滯(滯)
 參(參) 慘(慘) 兩(兩) 兩(兩) 滿(滿)
 発(發) 廢(廢) 胤(胤) 胤(胤) 獵(獵)
 乱(亂) 辞(辭) 潜(潜) 潜(潜) 贊(贊)
 走(走) 徒(徒) 位(位) 位(位) 縱(縱)
 惱(惱) 腦(腦) 処(處) 処(處) 據(據)
 担(擔) 胆(膽) 未(來) 未(來) 麥(麥)
 寿(壽) 壽(壽) 鑄(鑄) 数(數) 樓(樓)

樂(樂) 葉(葉) 讀(讀) 統(續)
 竜(龍) 滝(瀧) 隨(隨) 髓(髓)
 康(鹿) 獮(麗) 聰(聰) 廳(廳)
 虚(虚) 戯(戯) 遲(遲) 解(解)
 独(獨) 触(觸) 疊(疊) 撰(攝)
 虫(蟲) 蚤(蠶) 仮(假) 兎(兎) 兎(兎)
 励(勵) 嘗(嘗) 国(國) 困(困) 困(困)
 円(圓) 凶(圖) 尅(壹) 実(實)
 写(寫) 宝(寶) 扣(控) 叙(敘)
 条(條) 様(様) 帰(歸) 気(氣)
 炉(爐) 儀(儀) 猷(猷) 画(畫)

苗(苗) 尽(盡) 礼(禮) 称(稱)
 糸(絲) 欠(缺) 声(聲) 台(臺)
 旧(舊) 万(萬) 号(號) 証(證)
 豊(豊) 弁(辨) 通(通) 辺(邊)
 医(醫) 鉄(鐵) 関(關) 双(雙)
 靈(靈) 余(餘) 館(館) 館(體)
 塩(鹽) 点(點) 覺(覺)
 闘(闘) 刺(刺) 亀(龜)

文部省檢定濟

昭和三十三年二月十五日 高女學校學業國語科用

發行所

東京市神田區神保町一丁目二十五番地
振替口座東京二六四四番
大阪市東區博愛町五丁目五十六番地
振替口座大阪四七一番

東京修文館
代表者 鈴木常松



昭和十二年八月五日印
昭和十二年八月十五日發行
昭和十三年一月二十二日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十七日訂正再版發行

編者 澤瀉久孝
印發者 鈴木常松
發行所 東京修文館

女子新國語讀本 新制版
定價各金六拾錢

東京市神田區神保町一丁目二十五番地
代表者 鈴木金之助
大阪市東區博愛町五丁目五十六番地
代表者 鈴木常松

國字表

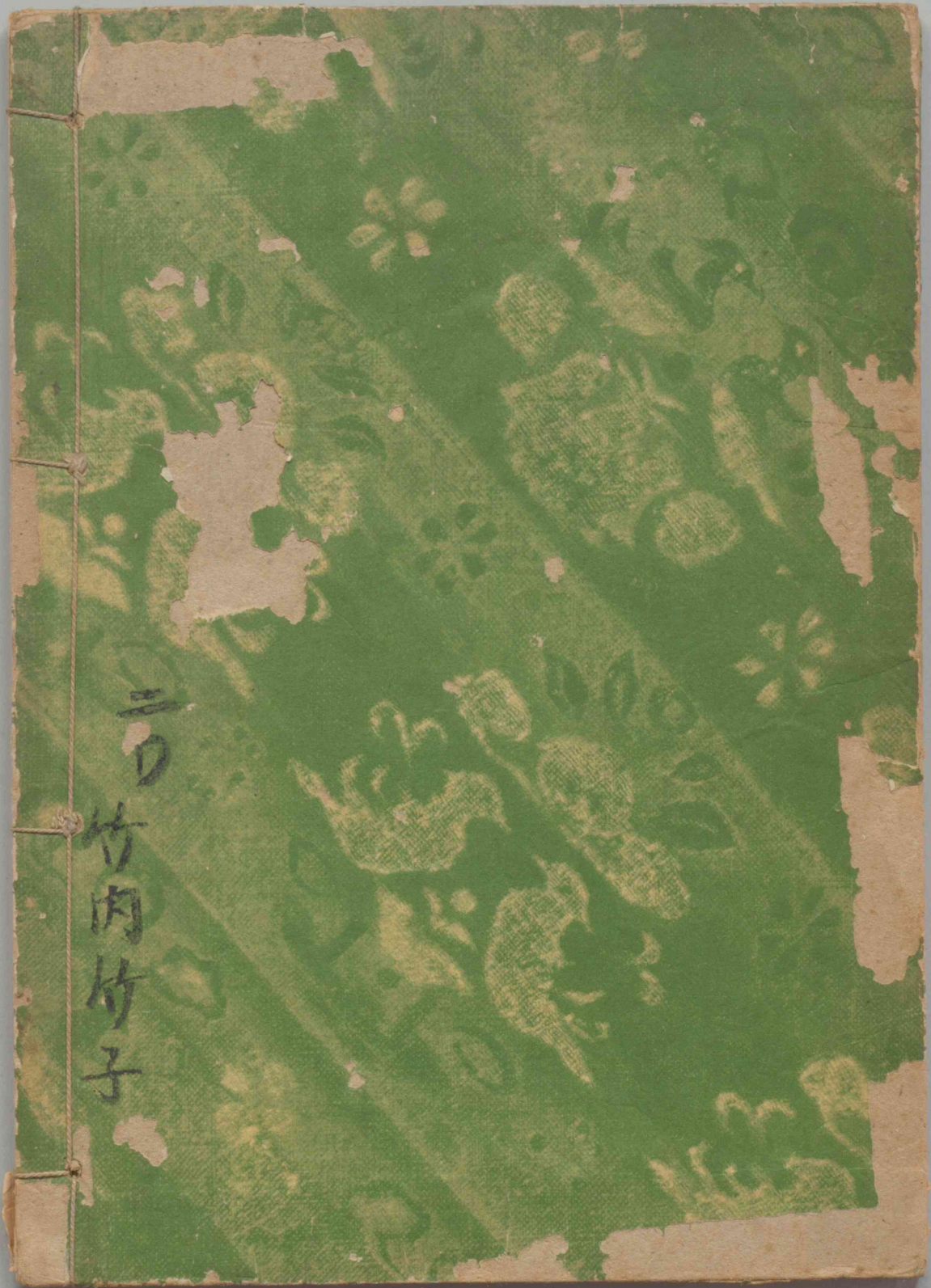
働	働	鱒	鱒	昌	昌	畑	裕	鮭	旬	鳩	鯉	銚	鯉	鯉		
はたらく	はたらき	はたはた	はたはた	はたけ	はた	はた	はさま	はえ	ハ	にほふ	にほ	にしん	にえ	ニ	なまづ	なまづ

枳	柎	題	禁	鋌	鯉	椽	鯉	扒	鯉	銚	銚	嘶		
ます	まさ	マ	ヘ	ふもと	フ	びやう	ひがひ	ヒ	はんざう	はらか	はめる	はばき	はばき	はなし

匆	柎	糲	歪	檜	笔	撈	耗	題	鷹	猷	俣		
ヤ	もんめ	もみぢ	もみ	もく	モ	むろ	むしろ	ム	ミリメートル	ミ	まろ	まて	また

絨	梓	衿	鐘	廳			
をどし	ヲ	わく	ワ	ゆき	ユ	やり	やがて

一四



二〇
竹内
竹子